
IS 衛星砲をもつIS

ごん助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 衛星砲をもつIS

【Nコード】

N8200U

【作者名】

ごん助

【あらすじ】

ごみ漁りが好きな少年がテンプレな出来事でちょっと変わった転生をして日々を過ごすお話

プロローグ（前書き）

初めまして、もしくはこんにちは。
何やってんだと言われるかもしれませんが、仕方ないのです。
ごゆるりとお楽しみください。

プロローグ

意識がはつきりとしてくる。

目を開けるとそこには何もなかった。

——俺の宝がない！

今ここに手があったのなら必死こいて探していただろう。
しかしここには手と思われるものは無かった。
なぜならここは、

——ん、やっと起きたかの？

生と死のはざまの空間だったから。

——さて、少しは落ち着いてくれたかの？

——あ、はいすいません、ご迷惑をかけて

その空間には姿の見えないものと意識だけの存在がいた。
心なしに姿の見えないものの声がやつれているようだ。

——さて、今までに言った事はわかってくれたかの？

——ええ、大体は。簡単に言えば部下のせいで僕が死んでしまったから、ランダムに能力を付けて別の世界へ飛ばすって事ですよね？

——うむ、その通りじゃ。…ならばさっさと能力と機体を決めてしまおうかの

意識体の前に六枚、そのうち三枚で分かれているカードが出てくる。

——あれ、能力だけじゃないんですか？

——うむ、お主がいく場所にはちよつとしたものがあつての、それをお主にも与えるという事じゃ。

——わかりました……じゃあ、これとこれで

意識体は二枚のカードを選んだ。するとその選んだカードが消えて、見えないものの声が響く。

——ふむふむ、了解した。次はこのカードじゃ

残りのカードが消え、代わりに禍々しい雰囲気のカードが出てくる。

意識体は一瞬ためらった後に決意したのか一枚のカードを選ぶ。

——これは…

——え、どうかしたんですか！？

——…いや、少し前の子が可哀そうになつての。彼には少しおまけ

しとかないとな。もちろんお主にもじゃがな

意識体は思う、こんなに適当でいいのか！？と。

——良いんじゃないよ、どうせ本職じゃないしの。…さて、準備はでき
たぞ、逝つてくると良い

——いくの字がちがー

全てを言いきる前に意識体は消えていった。
それを見送ったものは、

——さて、もう一仕事頑張るかの

と呟いたそうだ。

プロローグ（後書き）

こんな感じで進めていきます。
以降、よろしくです。

キャラ、機体説明（前書き）

安直な主人公の名前。

キャラ、機体説明

我道 藍 がどう らん

本作の主人公。前世の記憶は無い。

趣味は楽器を弾くこととガラクタ漁り。

孤児院育ち、面倒見がいい。

見えないものからはガンダムXと不思議な体をもっている。

ちなみに不思議な体とはアニメのガンダムXのように異様に頑丈な体の事である。

容姿はガロード・ラン

ガンダムX

旧連邦軍が開発したガンダムシリーズで最強を誇る機体。

“サテライトシステム”を装備した対コロニー殲滅用のガンダムであり、その破壊力は最大出力だと一撃でコロニーを破壊する。“Gコントロール・ユニット（Gコン）”と呼ばれる着脱式のコントロールレバーが起動キーになっており、Gコンがなくては動かすことができない。ティファの導きでこのガンダムを発見したガロードがパイロットになるものの、フォートセバーンでカリス・ノーテイルラスと対戦した際に破壊されてしまった。

装備のシールドバスターライフルは、シールドとしても使用可能なライフルで、装甲は通常の3倍。ビームソードは戦艦クラスの装甲も切り裂くほどの威力を持つ。シールドバスターライフルもビームソードも、サテライトシステムからエネルギーが供給される仕組みとなっている。

またガンダムタイプのモビルスーツには、ニュータイプ能力に対応したフラッシュシステムが搭載されており、専用のビットモビ

ルスーツ（Gビット）を12機コントロールすることが可能であった。ガンダムXの場合、サテライトシステムの初動時における回線接続は、このフラッシュシステムによるサイコミュ通信で行われないものであった。

ホームサ

イトより抜粋。

武装

- ・サテライトキャノン×1

言わずと知れたばかげた威力を持つ武装。

- ・シールドバスターライフル×1

ビーム銃でありながらシールドを装備した特殊兵器。通常のシールドの3倍の装甲を有し、ビームライフルとして使用しつつ敵からの攻撃も防御する。エネルギー源はサテライトシステムからで、通常はサテライトシステム下部にジョイント・格納する。

- ・大型ビームソード×1

接近戦用の兵器。通常のものよりも大型で、戦艦クラスの装甲も貫くほど。エネルギー源はサテライトシステム。出力が高いためグリップも独特の形状を有する。

- ・ブレストバルカン×4

胸部内蔵型のバルカン砲。

- ・ショルダーバルカン

左肩部への追加武装。

ガンダムXディバイダー

カリスのベルティゴにより破壊されたガンダムXを、チーフメカニックのキッド・サルサミルが改造したもの。

状況に応じて使えるバリエーションのある武装として以前からキ

ツドが温めていた独自のアイディアで、破壊されたサテライトキャ
ノンの代わりに装備が加えられた。

その中で主力とされた装備がディバイダーである。大型の盾とし
て使用されるが、中央から二つに割れると19連装ビーム砲（通称：
ハモニカ）となり、連射が可能。両サイドのバーニアにより、ビー
ムを発射しながら地上を高速移動することもできる。また、ディバ
イダーをバックパックに装着し、他のバーニアと併用することで、
長時間滞空も可能になった。バックパックには飛行用可変バーニア
2基とエネルギーポッド2本が装着されている。

ガロードがダブルエックスに搭乗するようになってからは、Gコ
ントロール・ユニットがなくても操縦できるよう改造され、ジャミ
ルがパイロットとなった。

ホー

ムサイトより抜粋

武装

・ディバイダー×1

ジャンクパーツを組み合わせで、ガンダムXの装備にしたもの。試
作用の展開式シールド、モビルアーマー用大口径スラスタ、革命
軍の対モビルスーツ用多連装ビーム砲（通称：ハモニカ）を用い、
補助飛行ユニットとしても使用できるよう組み上げられた。

通常用途のシールドに加え、補助飛行ユニット、19発多連装ビー
ム兵器の機能を併せ持ち、ガンダムX改造後の主要装備として活躍
する。

・ビームマシンガン×1

ディバイダー同様、ジャンクパーツで組み上げた兵器。旧連邦の戦
艦に装備されていた2連装メガ粒子砲をビームマシンガンとして改
造したもの。

・ビームソード×2

ガンダムXに装備されたものと同じ。

・ブレストバルカン×4
胸部内蔵型のバルカン砲。

少しだけ追加設定。

フラッシュシステムは既に登録済み。
ディバイダーに換装可能。

キャラ、機体説明（後書き）

抜粋はまずかつたかな…？

第一話

「ここが…」

隣で一夏が茫然としている。まあ、そうだろうな、なんたってここは男子が居ないはずのIS学園なんだから。

「ほれ、突っ立ってんなよ一夏、周りからじろじろ見られてんだから」

「あ、…つとわりい」

全く、一緒に居るこっちの身にもなれっつての。そもそもお前が道を間違えなければこんなことにはならず普通に藍越学園に入っていたというのに。

「ほれ、女子に見とれるのは良いがほどほどにしとけ、こっちが恥ずかしい」

「別に見とれてねえよ!」

どうだか。ここに居る女子だけでも美少女といえる子ばかりかな。…おっと、話がそれていたか、さっさと教室に向かわないとな。

「行くぞ一夏、俺たちが行く教室は…っつと」

「えっと、一年一組、だな」

そうだった、さつさと行こう。さつきから女子の好奇の眼が突き刺さっているし。

「あ、ちょっと待ってっ！」

後ろで一夏が何か言ってるが無視して先へ進む。…ん？あれはまさか！

「あれ、いつの間にお前教室へはいったんだ？」

「…お前の悪い癖が始まってたから先に行ったんだが…お前が来てくれて助かった…」

あゝこりゃきついな、さつきだって教室に入った瞬間一斉に視線が集まったからな。あれにはマジでビビった。

「いつもの癖でな、あれを見ると衝動を抑えきれなくてな」

一夏の後ろに座りながら言い訳をする。仕方ないんだよ、余りもので作れるものなんてたくさんあるんだから。

「さて、そろそろ始まるみたいだぞ？」

「ん、そうだな」

さて、俺たちの担任はどんな人なのかな？ などちよつと期待していた。そこに入ってきたのは。

「全員揃ってますねー。それじゃあSHR始めますよー」

見た目は子供、中身は大人を素で体現したような先生だった。

「…それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

山田先生？ だったかな、先生が何か言っているようだ。が耳に入らない。今俺の脳内では臨時会議が行われていたから。

脳内A あれは何だ！？ まさしくロリ巨乳というジャンルを体現している先生ではないか！？

脳内B しかも見た感じドジっ子の特性も持っているようだ、ぐつと来るものがあるな。

脳内C そもそも、どんな食事したらあんな体型になるんだ…気になるな…

??? 何言ってるんだお前ら！ ティファが一番に決まっているだろ！？

A B C !？

なんてくだらない会議をしていたら頭にものすごい衝撃が襲った。
意識が急上昇し、そこに居たのは

「何をしている、馬鹿者」

「ぬおつ、呂布!？」

ズドン!およそ出てはいけなだろうと思われる音が俺の頭の上
で響く、それに伴う激痛。

「誰が三国志最強の武将だ、馬鹿者」

織斑先生、あなたの背後に般若が見えます。しかし何故に女子が
涙目なんだ?訳がわからん。

「ぐおおおおおお…」

「お前の番だ、さつさと自己紹介をしろ」

自己紹介?ああ、今はそんな時間か。…しかしこの気まずい雰囲気
は何なんだ、一夏、お前何かしたんだろ、そうじゃなきゃこんな
空気にはならないし。

「うう…了解…我道 藍だ、趣味はガラクタ漁りだ。よろしく頼む
ぜ」

まあ、これでいいだろ。…ん?どうした一夏、そんな顔をして。

「お前…千冬姉のあれを何度も食らって平気なのかよ…」

ああ、それか、やけに俺って体が頑丈なんだよね。…どうしたんですか織斑先生？

「やはりお前用に鉄製の物を用意した方がいいのか…」

それやったらもう人殺しの範囲でつせ織斑先生。絶対に耐えられる自身がない。

何かあの二人の先生が話していたけど頭の痛い俺には聞きとる余裕がなかった。

「諸君、私が織斑千冬だ。君達新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言う事はよく聴き、よく理解しろ。出来ないものには出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五歳を十六歳までに鍛え抜く事だ。逆らってもいいが、私の言う事は聞け。いいな」

それはもう脅迫の類です。先生。恐らく一夏も同じことを考えるだろう。

ん？逆らったらどうなるかだって？決まってるじゃないか、俺の頭がトマトになるぜ。

「キヤーーーーー！ 千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉さまに憧れてこの学園に来たんです！ 北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉さまの為なら死ねます！」

なんだこれ、新手の宗教団体か？心酔率がとんでもないんだが。

「…毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それでも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

そのとおりだと思います、せんせー。いつそのこと、宗教立ち上げたらどうですか？なんて事を考えてたらチヨークが飛んできた。頭に当たったと思ったたら粉末状になっていった。…どんだけの威力で投げてんですかあんたは。

「きゃあああああつ！ お姉さま！ もっと叱って！ 罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡をして〜！」

凄い結束力だね、これは。三十人三十一脚普通に出来るんじゃないのか？

「さて、我道」

「はい、なんですか？」

「返事をするときは何でしょうか、だ。お前は何もしてなくても殴られると思っておけ」

「理不尽だ！」

もう強制過ぎて何も言えねえよ、どんだけストレス溜まっているんですかあなたは。目が本気なのがホントに怖い。

「まあ、良いだろう。これでSHRは終了だ。諸君らにはこれからISの基本動作を半月で覚えてもらおう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ、よくなくとも返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

脅迫です、理不尽です。それでも純情にうなづく女子たち…怖い
です。

こうして俺と一夏の男二人だけの学校生活は幕を開けるのだった。

第一話（後書き）

ゆっくりと、書ける範囲で書いていこうと思います。

第二話

さて、結果から言うで一夏の状況は思ったよりひどかった。

そりゃあ、いきなりの入学だし内容を覚えにくいだろうけど、だからと言って電話帳と間違えて捨てるのは無いだろう。

ちなみに俺は機械系にものすごく興味があるし、八割くらいは覚える事が出来た。

「ちょっと、よろしくて」

二時間目後の休み時間、一夏に金髪ロールの見るからにお嬢様な女子がやってきた。

ちなみに一時間目は箒とかいうポニーテールの女子が話しかけていた。まったくもって絡まれやすい性質なんだよな、一夏って。

そんな事を思っているうちに二人の会話は進む。

「何の用だ？」

「まあ、なんて返事ですの。私に声を掛けられるだけでも光栄ですよ。それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

「私を知らない！？ あなたはどうなんですの！？」

気が付いたらお嬢様風の女子に名前を聞かれてた。

「ああ、確か…セシリア・ビルギットだろ？」

「オルコット、です！ 私はセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生にして入試主席ですよ」

上手く聞こえなかったけどセシリア・ビルギットって言うてたよな？

「代表候補生、ね…専用機持ちか？」

「その通りですよ。これで私の偉大さが…」

「なあ、藍」

地味にこんな態度の子でも代表候補生になれるのか…みたいな事を考えてたら一夏が話しかけてきた。

「代表候補生ってなんだ？」

話を聞いてたんだろう女子数名が思いっきりこけたのが見えた。とはいっても結構ビビった。見る、あのビルギットも啞然としているぞ。

「あゝ、掻い摘んで説明すると、国家代表の操縦者の候補だ。簡単に言えばプロにスカウトされた原石みたいなモンだって考えればいい」

「へえ、凄いな」

「…あなた、私ををバカにしてますの？」

恐らく素じゃない？そう言うてやろうかと思ったけど、やめた。

なんか可哀そうだと思ったから。

「大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせられるかと思っていましたけど、期待はずれですわね」

俺はなかなか知っているけどな。もしかしたら高く売れるかもしれないし。

「ISの事でわからない事があれば、まあ…泣いて頼まれたら教えるてもよくってよ。なんせ私、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

教官？それなら俺も倒したが…言わない方がいいか？

「教官なら俺も倒したぞ？」

一夏ア…てめえ余計な事を言いやがったな…

「は…？ わ、私だけと聞きましたか？」

「女子だけってオチじゃないか？」

見事に俺の考えと一致したな、一夏。だが、なんか面倒事を起こした感があるんだが。

「つ、つまり、私だけではないと…？」

「いや、知らないけど」

「あ、あなた！ あなたはどうなんですか！？」

「あゝ、まあ、一応な？」

俺の場合は武装でビビって戦意を喪失したって感じか？まあ、使わないで戦ったけどな。

他にも何か二人は言い合っていたが、チャイムが鳴り、渋々といった感じで引きさがっていった。

さて、始まった三時間目。先生。怖いのでこっちをにらまないでください。悪気はなくても怖いっす。

「それではこの時間では実践で使用する各種装備の特性について説明する。――ああ、そうだ。その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

代表者？それなら代表候補生でいいんじゃないか？そして一夏、お前はサッパリわかってないな。

そんな一夏に説明するかのように織斑先生は説明を続ける。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席：まあ、クラス長だ。ちなみにクラス対抗戦では、入学時点での各クラスの実力を測るものだ。今の時点で大した差は無いが、競争は向上心を生む。一度決まれば変更が

ないからそのつもりで」

んじゃ、誰が推されるか見てみるかねえ…てか、候補生のビルギットで良いじゃん。アイツ自分が呼ばれるのを当然って顔してんぞ？

「はいっ！ 織斑君を推薦します！」

「私もそれが良いと思います！」

あ、一夏が呼ばれた、これで俺は呼ばれずに…

「私は我道君を推薦します！」

「あ、私も我道君がいいと思います！」

おい…誰だよ俺のISは歯止めが効かないんだぜ？下手したらあいつが怪我するかもしれないじゃないか。

「…では候補者は織斑一夏に我道監…他にはいないか？ 自他推薦は問わないぞ？」

主にビルギットの方を見て先生は言う、今さらになって気がついたのか一夏が素っ頓狂な声を上げた。

「お、俺！？」

しかも立ちあがって。お前…そこまでして目立ちたいのか？いや、ここに居る時点ですでに目立っては居るんだけどよ。

「織斑、席に着け。邪魔だ。…さて、他には居ないのか？ 居ない

なら織斑か我道、どちらかに――」

「待ってください！ 納得がいきませんわ！」

バンツ！と音を立てながらビルギットが立ち上がった。

「そのような演出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ 私に、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

なんつーか、オルコット？って凄く自尊心が高いんだな。まあ、気にするほどじゃないんだが。

「実力から行けば私がクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ 私はこのような島国までISの修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

…別に悪口言われんのは慣れてんだけどさあ…それは人としてどうよ？…プライドが高すぎるのもあれだなあ…

「良いですか！？ クラス代表とは実力トップがなるべき、そしてそれは私ですわ！」

確かに、それも正論だろうよ。けどなあ…

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなければいけないこと自体、私にとっては耐えがたい苦痛で――」

悪いが、禁止ワードだ。

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「この国で暮らす事が苦痛だあ？ とんだわがまま娘だなおい、世界の中心は自分でまわってるとでも思ってたのかあ？」

「なっ…！？」

真っ赤に顔を染めるオルコット。して一夏、それはある意味の自慢だ。

「あ、あ、あなたね！ 私の祖国を侮辱しますの！？」

「ならあんたはこの国にすむ人たちを侮辱してんだ、そんなくらい分かれば鳥頭！」

「っ——決闘ですわ！」

またバシン！と机を叩くオルコット。関係ないが壊れそうだぞ？

「おう、良いぜ。四の五の言うより都合がいい」

「その勝負乗ってやるよ、地獄ってモンを見せてやる」

「言っておきますけど、あなた達、わざと負けたりしたら私の小間使い——いえ、奴隷にしますわよ」

「侮るなよ、勝負で手を抜くはずがないだろ」

「それは俺らのセリフだろうが」

本当に自信たっぷりだよなあ、オルコットって。

「そう？　何にせよ丁度良い機会ですわ。イギリス代表候補生、この私、セシリア・オルコットの实力を示すまたとない機会ですわね！」

うわあ、一夏から怒気が襲ってきてるよ…思ったより怖いな、おい。

「それで、ハンデはどの程度つければよろしいのかしら？」

「……いらねえよ、そんなもん」

「いや、俺は一つだけもらうとするわ」

「藍！？」

落ち着け、一夏。これはあいつを自重させるための策だよ。

「ほら、後ろの誰かさんがそう言ってますからあなたも一つだけ聞いてあげますわよ？」

「デメ…」

「落ち着けって、一夏。…俺がもらうハンデは『攻撃をよけるな』だ」

『は？』

クラス全員の声が揃って間抜け声を出す。

「ああ、避けるな、といつても俺がやるのは一発のみだ。それを耐えきつたらお前の勝ちだ」

「な！？…それでは私に負けると言ってるも同じじゃありませんか！？」

「ああ、かといってナイフでブスリってわけじゃないさ。俺がやるのは一発のみだ」

そういつた俺の言葉にクラスの女子はクスクスと笑い声を立てる。

「あら、この私を一撃で倒す自信が御有りのようで？」

「ああ、急所も狙わねえよ。…一夏はハンデいらなんだよな？」

「あ、ああ。むしろこっちがつけてやりたいくらいだぜ」

強がらなくてもいいと思うぞ、俺は。まあ、お前の場合本心なんだろうけどさ。

「そんなもの不要ですわ！」

これぞ売り言葉に買い言葉、ってか？

「さて、話は纏まったな。それでは勝負は一週間後の月曜日。放課後、第三アリーナで行う。織斑、我道、オルコットはそれぞれ用意しておくように。それでは授業を始める」

織斑先生の話でとりあえずはこの騒ぎは収まったが、何所かピリピリした雰囲気で授業が進んでいった。

準備は一週間。一夏と特訓でもするかねえ…

第三話（前書き）

戦闘シーンがかなり短いです。ご容赦を。

第三話

なんだかんだで決闘の日。

この日までに色々な事があった。

少し内容を言えば、一夏の鍵に1025とちゃんと部屋が用意されていたのにも関わらず、俺の鍵に書かれていたのは倉庫の二文字だけだった。

その後はさっさと部屋に入って寂しさを紛らわせるために音楽をひたすらに聞いてた。

他にも色々あるのだが、時間が迫ってきているので意識を現実に向けないとな。

「…んで、まだ一夏の専用機は届かねえのか？」

「そうだなあ…」

「さらに、ISに関わらずにここ一週間は剣道をしてた、と」

「そうだなあ…」

「…いい加減に現実に戻ってこい、俺もさっき帰ってきたばかりだ」

「…ああ…でもよ、この状況じゃあな…」

まあ、そうなるだろうな。今ここはアリーナの待機スペースだもんな、不安にもなるだろう。

「ま、最初は俺が出るから、そんなに気にすんな。空気をやわらげ

てやつからよ」

「だったらさつさ行って来い馬鹿者」

ズドン！という音と共に姿を現す織斑先生。さつきの効果音は頭を殴られた音だ。

「ぐおおおおおお………わかりましたよ……今から行きます」

さて、ISを起動させるか。

頭の中でISをつけた自分を思い描く。自身の周りに光がまとい、俺を囲む。

周りとは違うからちっとは驚くかな？

「さて、と。じゃあ先生、行ってきますよ」

「さつさと行け。………いっておくが、アレを直撃させるなよ？」

「わかってますよ。ちょっと脅かすだけですから」

気が進まないが、今回は直撃させないようにする。ホントは当てても死にはしないように出来るんだけど、一生もののトラウマになるだろうしなあ。

「んじゃ、いきますかね！」

とりあえず、最初に思ったんだが、人多すぎるだろ、これ。

赤色や黄色のリボンも見えるし。

俺が出たときの反応は様々だった。

あるものは自身のISと違う事に驚き、
またあるものは自身の国への報告…恐らく戦闘データをとるつもり
なのだろう。

これまた驚いたんだが、目を輝かせて見ているものが居たのだ。

「さて、逃げずに来ましたわね。その姿勢だけは褒めてあげますわ。
…それがあなたの」

「ああ」

白を基準としたトリコカラーの機体。全身装甲、何より目立つのは
背中に付いているL字型の機械——実際はリフレクター——だろ
う。

「これが俺のIS、その名をガンダム…いや、GXっていうんだ。
…それで、約束事は忘れてないよな？」

「ええ、…あなたの一撃を避けるな。耐えければ私の勝ち。でした
わね？」

「ああ、防いでくれてもかまわない。どの道、俺は噛ませ犬だから

な」

そこまで言って試合……いや、演技を始める。無論、俺が負ける、な。

「さあ、構えとかないとやばいかもよ？ ……サテライトシステム、起動」

そう呟くと、L字型のリフレクターが開きX字になり、背中にあった巨大な砲身が肩に乗っかる。

「照準用レーザー、照射」

GXの胸から、レーザーが発射される。…少し前から思っている事だが、俺の中にある記憶とは少し発射までの手順が違うみたいだ。まず、本来ならば月が出ていないと使えないらしいのだが、どうやらこちらは電気が通っているものがあれば使えるらしい。この場で言えば、シールドに当てれば使えるらしい。

さらに、リフレクターに向かって発信される何かを受信して撃てるようになるのだが、こちらではレーザーを介して回線が無理やり繋ぎ、そこからマイクロ波なるものを受け取ってエネルギーへと変換されるのだ。

つまり、電気が常に通っている物にレーザーを当てればあれは撃てるってことだ。

『電流の流れを確認。マイクロ波へと変換開始。完了後Xへと送電します』

その間にもチャージは進んでいく。あ、みるみるオルコットの顔色が悪くなっていく。恐らく、警告表示が出ているのだろう。

一方、その頃観戦していた一夏達はと言うと。

「あれが、藍のIS…」

一夏は純粹に驚き、

「あの馬鹿者、やっぱりあれを使う気なのか…」

千冬は呆れたように蘭を見ていた。

「あの、織斑先生、あれって？」

千冬の話聞いていた箒がおずおずと千冬に聞く。

「…あいつは、サテライトキャノンを使う気だ」

「「サテライトキャノン？」」

「ああ、衛星砲などでたaramのように見えるが、あれは本物だ。威力がケタ違いすぎる」

「ど、どのくらいですか？」

箒の質問に千冬は少し考え、

「…およそ30%でこの学園が吹き飛ばすな」

想像したのだろう、二人は顔を真っ青に染める。

「まったく、衛星砲とはわらんな。電気が通っている物にアレ（レーザー）を当てれば撃てるようになるなど恐怖以外の何物ではないな」

真剣な表情でモニターをみる三人。そこにはリフレクターと、体の側面を青白く発光させたXがいた。

「さて、懺悔はすんだか？ 覚悟しろよ？」

「いや、ちよつと！ これは洒落になりませんわよ！？」

今になって喚きだしたか。まあ、どんな事を言われようが撃つことに変わりはないのだが。

「この前言った事を後悔するといひさ…手遅れだな」

少しだが青白くなったりフレクターと側面。およそ5%ってところか。引き金に力を込める。

「あ、あの！ この前の事は謝りますからどうか…」

「もうおせえ！」

そして俺は引き金を引く…前に上に向かって引き金を引いた。爆音とともにビームが発射される。

当然、オルコットには当たらなかったが、それでも結構近くにビームが通り、声にならない悲鳴を上げた。

ビームはシールドを容易く突き破り、空へと消えていった。

『…………』

これには観衆の声もピタリとやんだ。まあ、しょうがないよな。強固なシールドが元から無かったかのように抵抗もせずに突き抜けたのだから。

さて、気を取り直して声を出す。

「あーあ、はずしちまったかー。ま、しょうがないか。これで賭けはお前の勝ちだ。おめでとう」

…ちゃんと聞こえてんのか？…まあいいけれど。

「さて、負けたもんがここに居るのもあれだから、俺はさっさと戻る事にするよ」

ま、一夏がフラグ立てるなり何なりするだろうからさ。

ズドオオン！！

ピッドに戻ってきた時にやってきたのは織斑先生からの洗礼だった。IS解除してないのにこの痛み。流石っす。

「直撃させるなどといったが、あれはやりすぎだ馬鹿者」

いや、でもしょうがないですよ、あれは。まあ、ちょびつと驚かそうとはしたけどさ、あそこまでビビるとは思わなかったす。

「そもそもあいつが空中に居たから何も被害はなかったが、もしも地上に居たらどうしたんだ？」

「あれです、あっちの方のアレを使います」

「それもやりすぎだ馬鹿者」

こんなやり取りをしているけど、実際は一夏の戦闘を見てます。一夏のISはまさしく白。純白と言ってもいいほどの驚きの白さだ。オルコットの方はあれで頭が冷えたのか、冷静に闘いをしていた。

「あちやゝ、逆手に出ちまったかな？」

本来ならあのまま戦意喪失の中で棄権するか、それともやけになつて特攻するかと思つたが、そこは代表候補生だろう。頭が冷えたようだ。

当然、そんな状態のオルコットに一夏は勝てるはずもなく、逃げ回り、一次移行をしたが、善戦空しく、三十分くらいでおとされてしまった。

これで代表はオルコットに決まりだな。まあ、最初からわかりきつてた結果だけど。

……おれ、出てきた意味あつたのか？

第三話（後書き）

グタグタですいません。ここで少し補足を。

サテライトキャノンは電流が流れているのなら撃てますが、かなりの電力が必要となります。

それ故に乾電池などでは電力が足りず、撃てないのです。

要するに、電力を垂れ流しているような場所じゃないと無理、みたいなものですね。

第四話

翌日。

教室に入った俺を待っていたのは女子からの怯えた視線だった。
…ちよつと泣きたくなつた。

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定ですね。あ、一繋がり
でいい感じですね!」

S H R。

前では一夏が茫然としてた。まあそうだよな、俺もビックリしてる
わ。

「先生」

「何でしょうか我道君?」

「何で一夏が代表になつたんだ? 俺も一夏もビルギ…オルコット
に負けましたよ?」

「それは私が辞退したからですわ!」

ここになって登場か、オルコット。…無理しなくていいぞ?こつ
ち見てプルプル震えてんのを見てるところがちが可哀そうに思えてく
るから。

「え、えつとですね…わ、私も大人げなかつた事を反省しましたの。

それで一夏さんにクラス代表を譲る事にしましたわ。IS操縦には実践が何よりの糧です、クラス代表になれば闘いに事欠きませんからね」

ふむふむ、なるほど。確かに一夏の戦闘センスには目を見張るものがあるしな。…恐らくだが、あいつは一夏に惚れたんだろう。なんとなくわかる。後幕の態度で判断した。

女子もわいわい言ってるな。何言ってるのかうるさくて聞こえないけど。

「なっ！ そんなのって!？」

「一夏、諦めようぜ？ 敗者は勝者に従うべきだ」

「お前もだろうが!」

なんてくだらないことを一夏と話してたんだが、

パンツ！

机をたたく音と共に箒が立ち上がった。

「…あいにくだが、一夏の教官は足りている。私が、直接頼まれたからな」

あれえ？俺の頭の中では、

一夏「藍、一緒に訓練しようぜ?。」

俺「そうだな、男同士仲良くやるか」

第「いや、ここは幼馴染の私がやるべきだ、部外者はすっこんでいるといい」

一夏「え、ちょっと？」

第「さあ、行くぞ一夏！」

…的な感じだったんだが。あれ、俺の扱いがものすごく酷くていじめてたらのほほんとしてた少女に慰められた。あの優しさが懐かしい。

さて、俺が現実逃避している間にも議論は進んでいたらしい、が、織斑先生の一声で場は収まった。あ、授業の用意しねえと。

一時間目後の休み時間。

俺と一夏は特にやることもなかったので昨日の事について話していた。

「それにしてもさあ、あの一撃はすごかったよなあ」

「ああ…サテライトキャノンの事か。あれで5%だ」

「…お前を敵に回したくなかったよ」

「それより、お前の方こそ凄かったじゃねえか、候補生に三十分近く健闘してたじゃねえか」

なんて、いやそっちこそ、いやいやそっちこそみたいな会話を繰り広げていたら、噂の一人がやってきた。

「少し、お話よろしくでしょうか？」

あれ、この前より高圧的じゃ無くなっている？あのオルコットが？

「なるほど、一夏目当てね…んじゃ、怖がられるから俺はどうか行ってるぜ」

「あ、あの我道さん」

「ん？」

「えっとですね、あの時は感情的になりすぎていてですね…えっと、その…すいませんでした！」

…あのオルコットが謝っただと…！？

第一印象が傲慢の我がままなお嬢様のオルコットが！？

まあ、あれで何か思うところがあっただろう。

「…おつ、別に気にしてないが、謝ったからいいとするぜ」

とりあえずあの場から退散する。なんとなくめんどくさそうな事が起きそうだったし。主に一夏がらみで。

「やあやあがつくん、相変わらず可哀そうだね」

窓側で呆けていた俺に声をかけてきたのはあの時の心優しい少女、

布仏本音だ。

「可哀そうは余計だぜ？ 見てみるよ、あれはあれで面倒事起こしてるぜ？」

「おーおー、オリムーも人気者だねえ」

…まあ、客観的に見たらそうだな。あの雰囲気を除けば。

「んで、何の用だ？」

「んとね、あの決闘以来がつくんが怖がられてさみしい思いをしているのではないかな」って思ってきたんだよ、あとね、新しいがつくんのあだ名を思いついたんだ」

なんとなく図星で泣けてくる。…それとなんかあだ名が嫌な予感しかないんだが。

「とりあえず、聞いてやる」

「えっとね、あの一撃を見て思い浮かんだけどね、ガトーってどう？」

「俺は核を撃っていないし、帰還報告をしたわけでもない」

そんなわけでそのあだ名は拒否する。何時か誰かから追いかけるかもしれないし。

「ほれ、もうすぐ授業が始まんぞ、席に就け」

「ん、それじゃあがつくん、またね」

あっちの騒動はまだ終わってないみたいだけど、後で織斑先生のアレを受ければいいだろう。
さあ、授業の準備をすつか。

…ついでに言えばあの後、俺にまで織斑先生の攻撃が及んだ。
…理不尽だ。

第四話（後書き）

文才の無さに全俺が涙した。

第五話

「これより、ISの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、我道、オルコット、試しに飛んでみせる」

四月下旬、そろそろこの学園にも慣れてきた。

一夏はラッキースケベを連発してたりした。相手もなかなかにまんざらでもなさそうだった。とりあえず一夏にサテライトキャノンを撃ちこみたくなったのはしょうがないことだと思う。

これ以上回想を続けていると先生に殴られそうなので、ISを展開する。

前回の決闘の時と全く変わらないトリコロールの機体。そして背中にはリフレクターと巨大な砲身。

「ひっ！」

…オルコットさんよ、いい加減慣れてくれないか？流石に傷つくから。

こいつの目が光っただけでそんなに怖がるんじゃないよ。

「おい、我道、さっさと飛べ」

ん、感傷に浸りすぎていたようだ。すでに二人は上空で待機していた。

「何をやっている、ブルー・ティアーズと白式では、スペックは白式の方が上だぞ」

…訂正、一夏はふらふらと上がっていた。兎に角急がないとな。

背中の一バーストをふかして上空へ。

「わりい、遅くなった」

「大丈夫だぜ、俺も今さっき着いたところだし」

「だ、大丈夫ですわよ!？」

全然大丈夫に見えないっす。

「にしても、よく上手に飛べるな」

「つても俺は普通に飛ぶイメージをしてるだけだぜ？」

「一夏さん、イメージでも構いませんが、自身にあった方法を探した方が建設的でしょう」

「…なんか俺不遇じゃないか？この前の幕といい、オルコットといい。」

「そう言われてもなあ…。大体、空を飛ぶ感覚自体あやふやなんだよ。何で浮いているんだ。これ？」

「説明しても構いませんが、長いですわよ？ 反重力力翼と流動波干涉の話になりますもの」

「わかった。説明しなくていい」

良くいった一夏、あのままだと俺まで巻き込まれていたんだろうかな。

「あの、一夏さん、よろしければまた放課後に指導して差し上げますわ。その時は二人きりで…」

『一夏！　いつまでそんなところに居る！　早く降りてこい！』

暇だったから下を見ていたら筈が山田先生のインカムを奪って叫んだ。

あ、織斑先生に叩かれてらあ。

『織斑、我道、オルコット。急降下と完全停止をやって見せる。目標は地上から十センチだ』

「了解です。では、お先に」

最初はオルコット。危なげなく完全停止を行う。

「…流石は候補生だな。扱いが上手い。…んじゃ、次は俺が行くから良く見ておくように！」

リフレクターを後ろ向きに開き、受光部からエネルギーを放出させる。

勢いよく地上に向かって進むX。地上がはつきりと確認出来たところから体制を整える準備をし、一気に体制を逆にする。

「…ふむ、三十五センチか。まだまだだな」

流石は手厳しい織斑先生。容赦がないっす。
さて、一夏は…

ズドオオオオオオン！！

清々しいほどに勢いよく墜落した。

どんだけ勢いあるんだよ、クレーター作ってんじゃねえか。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろといった。グラウンドに穴をあけてどうする」

「……すみません」

その後、一夏を心配し、様子を見に来たオルコットに箒が突っかる。

いつも思うが、よくそんなに言い合って飽きないな。いつものオチが来るのを忘れてないか？

「おい、馬鹿者ども、邪魔だ。隅っこでやっている」

やっぱり怒られたな。見てて飽きないから何もしないけど。

「織斑、武装を展開しろ。それくらいは自在にできるようになっただろう」

「は、はあ」

「返事はい、だ」

「は、はいっ」

「よし、では始める」

何だろう、こう見ていると漫才にしか見えないのは。

それはともかく、一夏は右手を前に突き出して、その手首を左手でつかむ。

右手へ光があふれだす。

…こう見ていると、あれだな、厨二病みてえ、って思っちゃまうのは悪くないと思うんだ。

まあ、置いといて、光が収まるとそこには一振りの刀…雪片式型が現れた。

「遅い。0・5秒で出せるようになれ」

うわ、一週間の訓練の結果が一瞬にして意味を持たなくなった。

「次。我道、展開しろ」

「了解です」

俺は自身の右手に意識を集中させる。描くのは銃。攻防一体のライフルを思い描く。

光が収まり、ずっしりとした重みが右手にかかる。出したのはシールドバスターライフルだ。

「ふむ、まあまあだな、お前は0・4秒で出せるようになれ」

さっきから俺の評価が微妙だけど気にしない。じゃないと心が持たないからな。

「最後だ、オルコット、展開しろ」

「はい」

オルコットは光を垂れ流さずに一瞬で銃…スターライトmk?を展開した、が

「ほう、いい度胸じゃないか、代表候補生。私に向かって銃を向けるとは」

どういうわけか織斑先生に銃を向けてた。…オルコット、何もそこまで死に急がなくても…

「い、いえ、これは私のイメージをまとめるために必要な…」

「なるほど、イメージをするたびに私を撃つ気でいたのか」

「い、いえ、ですから…」

ドンドン墓穴を掘っていくな、オルコット。

必死の説明が通じたのか、織斑先生は納得した。恐らく、オルコットも癖を直すだろう。

「オルコット、近接武装を展開しろ」

「えっ、あつ、はっ、はいっ」

先ほどまでの一步間違えたら死へ直行の会話を乗り切って安心してたオルコットに追撃がかかる。

なんか焦っていたけどなにか問題があるのだろうか？

「くっ…」

「まだか？」

「す、すぐです。……………ああ、もうっ！ インターセプター！」

…ヤケクソだな、オルコットも。まあ、あいつの事だからどうせ接近されなければ平気みたいなことを考えて、ろくに近接武器の展開の練習をしていなかったのだろう。

「……………何秒かかっている。お前は実戦でも相手に待ってもらうのか？」

「じ、実践では近接の間に合いに入らせません！ ですから、問題ありませんわ！」

「ほう、先の戦闘では初心者である織斑にも懐を許していたように見えたが？」

「あ、あれは、その…」

諦めな、オルコット。今日はついてない日だと思えばいいさ。

「…時間だな、今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片づけておけよ」

まあ、後始末はさせるよな。…にしても、オルコットや箒はこういう時に限って見捨てるのか？

…頑張れ、一夏。俺はお前に同情するよ。手伝いはしないけど。

第五話（後書き）

勢い余つてまた投稿。

また書きなおすかもしれませぬ。

第六話（前書き）

書いている途中で我道の扱いどうしようか本気で考えてしまった。
これでもまだマシになった方かと。

第六話

「というわけでっ！ 織斑君クラス代表決定おめでとう！」

『おめでと〜！』

あちらこちらからパンパンとクラッカーの音が響く。場所は食堂。ちなみに俺はこのための準備で馬の様に働かされた。理不尽さに涙が出た。

慰めてくれた本音達三人組に感謝。

一夏の方を見てみると、嬉しいのか悲しいのかよくわかんない表情をしてた。

「…人気者だねえ、一夏は」

ちなみに俺の周りにはほんの数人しかいない。後は一夏の周り六割、他四割って所だな。

特にすることもないので適当にお菓子をつまむ。

こうして一夏を見ているとつくづく天性のフラグメイカーだよなあ。

あ、箒がそっぽを向いた。

「はいはい、新聞部です。話題の新生、織斑一夏君に特別インタビューをしに来ました〜！」

ん、一夏が新聞部の先輩にインタビューを受けてる。リボンの色でわかるけど、一年生じゃないのも混ざってるよな、こっ。

「ちょっといいかい？ 私は二年の黛薰子っていうんだ。さっそく
だけど話を聞かせてね」

… いつの間にここまで来たんだ、先輩。そもそも見つからないよ
うにこそ移動していたのに。
しかも他にも生徒が集まってきてるし。

「… いいですけど、よく俺を見つけましたね。見つからないように
してたのに」

「俺が見つけたんだ、お前ってば人の多い所が苦手だったからな」

お前のせいか、一夏。その顔やめい、むかつくぞ。

「さっそくですが、あの決闘の時すぐに退場した理由は？」

「ん、あれですか。あれはちょっとした約束だったんですよ。一発
しか打たない。代わりに避けるなって感じの」

「ほー、でもさ、何で外したの？」

「そりゃあ、あれを当てたらさすがに拙いでしょうからね、こっち
としてはちょっとした仕返しみたいな感じで撃ったんですよ」

織斑先生にも止められてたし。あ、オルコットが思い出したのか
顔を青ざめて震えてるぞ。

「なるほどねー、中々に子供っぽい一面がある、と」

「まあ、否定はしませんよ」

他にも二、三問質問に答えたりして、次に移るらしい。

「ふむふむ、中々にいい話が聞けたねー、それじゃ、次は写真ねー。ここは…織斑君とオルコットさんのツーショットかな。そしたら次は三人で」

俺は別に撮らなくてもいいと思うんだけどな。

俺の思いとは裏腹に黛先輩は着々と撮影の準備を始めてる。

「ほいほい、次は三人ねー」

オルコットと一夏が手をつないで写真を撮っている間、俺は箒が放つプレッシャーに耐えてなきやいけなかった。冷や汗が止まんないぜ。

「それじゃあ撮るよー。我道君に最近つけられた名前は何？」

そんなもんつけられてないんだけど。

「え？ えっと……ガトー？」

「残念！ 一組の白い悪魔だつてさ」

一夏、お前までなぜその名を知っているんだ。それよか悪魔って何だ？あの一撃がいけないのか？

んな事を考えてたら不意に頭に体重がかかり…

シャッターが切られた。

「うおっ!？」

と共に前のめりに倒れる。急いで背後を確認してみたら、

「何で皆入ってるんだよ」

一組全員がカメラ内に写る範囲にいた。どうやら勢い余って俺にぶつかったらしい。

謝ってくれたのでいいけど、写真には俺の顔は写らなさそうだ。

パーティーは十時過ぎまで続いた。

俺は主に隅っこでお菓子を本音と食べ、のんびりしたり、こっちに來た一夏と適度に話をしてたな。

まあ、わかった事が、女子のエネルギーと結束力は凄いつて事だ。クタクタの一夏に別れを告げて、自身の部屋へと戻る。

元が倉庫だったため、他の部屋よりかは広いけど、その分道のりが長いのが欠点だ。

そんなことを愚痴っていてもしょうがない。最近はこの道も短く感じられるようになったし良いとするか。

また明日は一波乱ありそうな予感がする。主に一夏がらみで。

翌日。

「転校生？」

「そうそう、中国の候補生らしいよ」

朝、クラスに入ってきたときに聞こえたのは一夏とクラスの子のそんな会話だった。

おはよー、と声をかけてくれるやつらに返事を返し、自分の席に向かう。

「よう一夏、何の話だ？」

「ん、ああ、藍か。実はな、中国から転校生が来るらしいんだ」

なるほど、昨日感じていた予感はこの事だったのか。

…しかし、外国に一夏の知り合いなんていたか？…わからん。

「あら、私の存在を今更ながら危ぶんでの転入かしら」

今日の態度も偉そうだな、オルコットは。

…ん？何か違和感を感じるぞ？

「このクラスに来るわけではあるまい。騒ぐ必要はない」

…ああ、そうだ！俺が近くにいるというのにおびえていないんだ！慣れたのか、一夏しか見えていないのかよくわかんねえけどなんか嬉しいな。

「それよりも、来月はクラス対抗戦だろう」

「そうですね、一夏さん！ 是非一夏さんには勝ってもらわないと。ですからより実戦的な訓練をするために、この私、セシリア・オルコットが相手を努めさせていただきますわ」

俺という選択権はもたらないんだよなあ。一夏と練習しようとするところからともなく二人がやってきて見た目はやんわりと、中身は強烈に反対してくるから、ろくに練習の結果をみてやれないんだよな。

でも俺なんて、基本一人で特訓だぜ？ 寂しいもんは寂しいんだ。

「男たるものなら勝ってみせろ一夏」

「一夏君が勝つとクラス皆が幸せだよ！」

「フリーパスのためにも！」

為にもってかそれが目的だろうに。本音も目を輝かせて言っていた気がするな。

優勝景品が半年デザート無料券だから、女子が執着するのも無理ないか。

「専用機を持っているのはうちと四組ぐらいだから楽勝だよ！」

「その情報、古いよ」

『……！？』

声が聞こえた教室の入り口を見る。そこには強気に見える小柄な少女がドアにもたれかかっていた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝で

きないから」

やる人がやるなら格好よく見えるだろうポーズを続ける少女。主に織斑先生とか似合いそうだな。でも、見るからに、

「似合わないよなあ……」

そんな小さなつぶやきは誰にも聞かれなかったようだ。

「鈴……？ お前、鈴か？」

「そう、二組代表の中国代表候補生鳳鈴員。今日は宣戦布告に来たってわけ」

ん？一夏はどういう事かあのツインテの少女の事を知っているようだ。ここで聞くのもあれなんで、会話は最後まで聞くことにする。

「何格好付けてるんだ？　すげえ似合わないぞ」

「んなつ……！？　なんてことを言うのよ、アンタは！」

おつ、これが素か。こつちの方が見た目的には似合うな。

つか、箒にオルコット、お前ら殺気を抑えてくれ、近くににいる俺に被害が来てるから。

ん？…あれは…ああ、ご愁傷さま、だな。

「おい」

「何よ！」

バシンッ！

「SHRの時間だ、教室に戻れ」

「千、千冬さん…」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ。そして入口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません」

ふむふむ、あの少女は織斑先生とも知り合いなのか、後で一夏に聞いてみるとするか。

「また後で来るからね！ 逃げないでよ一夏！」

「さっさと行け」

「は、はい！」

あれだな、チンピラが放つような感じの捨て言葉をいってさっさと行っちゃった。

「ってかあいつ、代表候補生だったのか…。初耳だぞ」

「…一夏、今のは誰だ？ えらく親しそうだったな？」

「い、一夏さん！？ あの子とはどういう関係で！？」

「織斑君知り合いなの！？」

バシバシバシンツ！ズドン！

「席に着け、馬鹿ども」

さて、俺は席に着いていたのに叩かれたのは何故？しかも音が違
ったし。

…なんか恨まれるようなことしたっけなあ…俺…

第七話（前書き）

長い上に主人公がほぼ空気状態。
ご容赦を。

第七話

一度目なら、今度こそはと俺も思う。

避けられなかった惨劇に。

二度目なら、またもかと俺は呆れる。
避けられなかった惨劇に。

三度目なら、呆れを越えて苦痛となる。

七度目を越えるとそろそろMになる。

「お前のせいだ!」

「あなたのせいですわ!」

「…ま、お前のせいだな…」

「なんでだよ……」

なんでだよ、ってそりやお前、あの話のせいで織斑先生に七回も
あれでたたかれたんだぜ?

ちなみにオルコットと箒はそれぞれ注意五回、実力行使三回となっ
ている。

何もしていないのに俺の扱いが酷すぎる。

「まあ、話ならメシ食いながら聞くから。とりあえず学食いこうぜ」

「む……。ま、まあお前がそう言うのなら、いいだろう」

「そ、そうですね。行って差し上げないこともなくってよ」

見事なまでのツンデレだねえ。見てて一夏が羨ましく思えるよ。俺を含めクラスの数人が一夏の後について行く。一夏の両隣にはツンデレ二人組が。

さて、今日の昼飯は何にしようか。一夏は日替わりランチ、箸はきつねうどん、オルコットは洋食ランチにしていた。

俺はあんまり食う方ではないので、ホットドック三つにする。

「待っていたわよ、一夏！」

あれは噂の転校生じゃないか。効果音でどーんなんて音が聞こえてきそうだ。

「まあ、とりあえずそこどいてくれ。食券出せないし、普通に通行の邪魔だぞ」

「う、うるさいわね。わかってるわよ」

お、意外と素直なんだな。あの二人組だったらこうはいくまい。

「のびるぞ」

「わ、わかってるわよ！ 大体、アンタを待ってたんでしょうが！ 何で早く来ないのよ！」

と思ったがこいつもそうか。理不尽だなおい、一夏はエスパーか？

「それにしても久しぶりだな。ちょうど一年ぶりになるのか。元気にしてたか？」

「げ、元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我病氣しなさいよ」

「…これまた凄い会話だな、一夏は癖のある子に好かれるのだろうか？」

「あー、ゴホンゴホン！」

「ンンンッ！ 一夏さん？ 注文の品、出来てましてよ？」

大変だな、あの二人も。これから一夏を狙うやつらは増えると確信できるけど、諦めないつもりだろうか？

「向こうのテーブルが空いてるな。行こうぜ」

おお、混雑しているはずの時間帯なのに空きがあるとは思わなかったぞ。

いや、先輩方が気を利かせてくれたのかもしれないな。何にせよ、よく見つけたと褒めとこう、心の中で。

「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？ おばさん元気か？ いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ。アンタこそ、なにIS使ってるのよ。ニユースで見た時びっくりしたじゃない」

なんか二人だけで盛り上がってんなあ、あの二人の視線には気付いてないのだろうか？あれには恐ろしくて話しかける事も出来ない。

「なあ一夏、その子とはそんな関係なんだ？」

「ねーねー、オリムーはその子と付き合ってるのかな？」

俺と本音のダブル質問。周りのクラスメイトも興味津津のようだ。特に箒とオルコットは返答を間違えたら殺すといわんばかりの目をしている。

「べ、べべ、別に私は付き合ってる訳じゃ……」

「そうぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼馴染だよ」

「……………」

「？ 何睨んでるんだ？」

「なんでもないわよっ！」

まあ、雰囲気からしてそうではないかとおもっていたけど、実際に知ると可哀想だな。

「幼馴染……？」

「あー、えつとだな。箒が引越していったのが小四の終わりだろ？ 鈴が転校してきたのは小五の頭だよ。で、中二の終わりに国に帰ったんだ。藍と会ったのは中三の頭だから、丁度入れ違いになっ

たのか」

「…なんていうか、タイミングが悪いっーか、間が悪いっーか…」
呟いたらギロツって睨まれた。地味に怖い。

「で、こっちが箒。ほら、前に話したろ？ 小学校からの幼馴染で、俺の通ってた剣術道場の娘」

「ふうん、そうなんだ」

じろじろと箒を見る鈴音。対抗するように見返す箒。二人の間に火花が散ったのを俺は見た。
まあ、でも、しばらくは俺の出番はなさそうなので、食事に専念するとしようかな。

「ンンンッ！ 私の存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、凰鈴音さん？」

「……誰？」

「なっ！？ わ、私はイギリス代表候補生、セシリア・オルコットでしょ！？ まさかご存じないの？」

「うん。あたし他の国とか興味ないし」

「な、な、なっ……！？」

うわ、どんどんオルコットの顔が赤くなってる。…ゆでダコみてえだな。

「い、い、言っておきますけど、私あなたのような方には負けませんわ!」

「そ。でも戦ったらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん」

まあ、代表候補生だから強いのは当たり前だろう。俺戦ったことねえもん。あの時は俺の一方的な攻撃だったし、一発だったし。

「……………」

「い、言ってくれますわね……………」

箒は箸を止め、オルコットは震えながら拳を握りしめた。二人から得体のしれない寒気があたりを襲う。他の女生徒が涙目になったんぞ。

「一夏、アンタ、クラス代表なんだって?」

「お、おう。成り行きでな」

「ふーん……………」

おお、どんぶり持ってスープを飲んでやがる、そこらの男子よかよっぽど男らしいな。

「あ、あのさあ。ISの操縦、見てあげてもいいけど?」

いいなあ、一夏は。俺なんて面倒を見てくれる相手がないんだぜ?

「そりや助か——」

ダンッ！机がほぼ同時に叩かれる。

あー、ついに二人が動き出すのか。

「一夏に教えるのは私の役目だ。頼まれたのは、私だ」

「あなたは二組でしょう！？ 敵の施しは受けませんわ」

やっぱ二人は怖いな、背後に修羅が見えるぞ。

「あたしは一夏に言ってんの。関係ない人は引っ込んでてよ」

俺だな。もはや眼中にないもんな。

「か、関係ならあるぞ。私が一夏にどうしても頼まれているのだ」
そうですか、お前の脳内ではそういうことになってるんだな。

「一組の代表ですから、一組の人間が教えるのは当然ですわ。あなたこそ、後から出てきて何を図々しいことを——」

「後からじゃないけどね。あたしの方が付き合いは長いんだし」

「そ、それを言うなら私の方が早いぞ！ それに、一夏は何度もうちで食事をしている間柄だ。付き合いはそれなりに深い」

「うちで食事？ それならあたしもそうだけど？」

へえ、二人ともそこまでの進展があつたら一夏も何かしら思うところがあるのではないか？と思うのだが…まあ、一夏はあれだからラッキーぐらいにしか思わなかったんじゃないんだろっか。

「いつ、一夏っ！　どういうことだ！？　聞いてないぞ私は！」

「私もですわ！　一夏さん、納得のいく説明を要求します！」

「説明も何も……幼馴染で、よく鈴の実家の中華料理屋にいった関係だ」

ああ、なるほど。それで飯を食いに行つてたのか。ん？でも食費がかかりまくるんじゃないのか？つか、箒の家も何か飯屋を営んでいるのか？

見てわかるように凰はふてくされて、箒とオルコットはほっとしてんな。

「な、何？　店なのか？」

「あら、そうでしたの。お店なら別に不自然なことは何一つありませんわね」

しっかし周りの女子も災難だよな。俺はもう慣れたけど。

「親父さん、元気にしてるか？　まあ、あの人こそ病氣と無縁だよな」

「あ……。うん、元気——だと思う」

ありゃ、少し表情が暗くなつたな。まあ、家庭の事情に踏み込ん

じゃ拙いだろうからいわないけど。

「そ、それよりもさ、今日の放課後って時間ある？ あるよね。久しぶりだし、どこか行こうよ。ほら、駅前のファミレスとかさ」

「あー、あそこ去年つぶれたぞ」

懐かしいな、あそこはよく一夏と弾の三人で行ったもんだ。

「そ、そう……なんだ。じゃ、じゃあさ、学食でもいいから。積もる話もあるでしょ？」

さて、飯も食い終わったことだし、俺は教室に戻るとしようかね。

「——あいにくだが、一夏は私とISの特訓をするのだ。放課後は埋まっている」

……と、思ったけど、またしても険悪な雰囲気の流れ始め、立つに立てなくなっちまった。

「そうですわ。クラス対抗戦に向けて、特訓が必要ですもの。特に私は専用機持ちですから？ ええ、一夏さんの訓練には欠かせない存在なのです」

おい、それをいうなら俺も専用機を持ってんぞ、俺は必要ないのかよ。

「じゃあ、それが終わったら行くから。空けといてね。じゃあね、一夏！」

つゆを飲み干して、そのまま去っていく凰。この空気の中颯爽と去っていくのは素直にすげえと思った。今度その度胸はどこから来るのか聞いてみようかな。

「一夏、当然特訓が優先だぞ」

「一夏さん、私たちの有意義な時間も使っているという事実をお忘れなく」

結局、教室に帰れるようになったのは、四人の話が終わってからだった。

第七話（後書き）

原作道理に進めたら最長になった。

次回は少しは戦闘シーンが入るかもしれない。

第八話（前書き）

前回の主人公の扱いについて反省。
反省をいかし、今回からの扱いには注意します。

第八話

「なあ、藍」

「？」

「ちふ…織斑先生の授業ではもっとしっかりしてた方がいいぞ？」

「ん？ 別にしっかりしてるつもりなんだけど」

「いや、ほとんど一日中ぼーっとして注意も受けてたじゃねえか」

「本当ですわ、私たちよりも心ここにあらず、的な感じでしたわよ？」

今は放課後。第三アリーナへ向かっている途中だ。

一夏がオルコットと筈に頼み込み、俺も一緒に特訓することが出来るようになった。

「でもさ、ちゃんとノートはとってたはずだぜ」

「訳わかんない文字で書いてわかるのかよ」

マジでか。しっかりしてるつもりだったんだけどなあ。これでの理不尽だと思っていた仕打ちにも理由があった事が判明した。

自分では大丈夫だと思っけていても周りから見たら異常だったのか、今日の俺は。

「山田先生なんて泣きかけてたぞ」

「しかし…我道さんがあれほどまで呆けるとは思いませんでしたわ。
…まさか、男色？」

「それは絶対ないから！」

ほら、オルコットの余計なひと言で周りがこっち見て話してんじやねえか！断じて俺にはそっちの趣味はない…はず。きっと。

「え？」

そうこうしているうちに入口に着いたようだ。一夏が間抜けな声をあげたのでその方向をしてみる。

「な、なんだその顔は…おかしいか？」

「いや、その、おかしいというか——」

「驚いたっつーか——」

「篠ノ之さん！？ ど、どうしてここに居ますの！？」

「いや、その言い方は失礼だろ」

居たのはIS『打鉄』を展開した箒だった。ちなみに俺は基本苗字で呼ぶが、箒は篠ノ之より箒の方がいいらしいので、そう呼んで

いる。何か嫌なことでもあったのだろうか。まあ、それは置いておこう。

打鉄は攻撃よりも防御に優れていて、初心者にも扱いやすいのが特徴だ。IS学園でも多く使用されている。

「どうしてもなにも、一夏に頼まれたからだ」

箒は近接格闘を担当し、オルコットは遠距離、俺は両方と話し合いで決まった。

少し前までは特訓に参加出来なかったけど、一夏の説得により、参加出来るようになった。

まあ、オルコット達も一夏が強くなるのは好ましい事だろう。それに、昼の一件も影響しているのだろうが。

「くっ……。まさかこんなにあっさりと訓練機の使用許可が下りるだなんて…」

それには驚いた。普通なら、何枚も書類を書いてようやく許可が下りるというのに、箒は俺らよりも早くここにきて待っていたことから、かなりの速度で書類を全部書いたということになるんだろう。

「では一夏、はじめるとしよう。刀を抜け」

実体剣が時々いいなって思う時がある。俺のはほぼビーム系だからな。

「では——参るっ！」

さて、二人のお手並み拝見と行こうかな。

「御待ちなさい！ 一夏さんのお相手をするのはこの私、セシリア・オルコットですよ！？」

「いや、順番でやれよ」

聞く耳持たずかよ。つか、一夏の特訓じゃないのかよ。

「ええい、邪魔な！ ならば斬る！」

「訓練機ごときに後れを取るほど、優しくはなくてよ！」

二人の戦闘が始まった。先に箒が袈裟斬りを繰り出す。オルコットが展開していた実体剣を使い、受け流す。そして距離をとり、片手に持っていた銃で撃つ。

…この場合は、俺が一夏の相手をすればいいのか？

「一夏、やるか？」

「お、おう。ちょっと離れてやるか」

右手首にある銀のブレスレットが俺のISだ。展開し、一夏と向き合う。

「威圧感あるよな、藍のISって」

「ま、全身装甲だから——んじゃ、行くぜ！」

一夏はその手にある雪片二型をまっすぐに構える。俺はライフルをシールドに変形させ、片手はサテライトキャノン基部にいつでも手が届くように構える。

そして互いに接近し――

「一夏！」

「何勝手に特訓してますの!？」

「うえっ!？ 勝手にって…お前らが二人で戦ってるから藍とやっ
てただけだよ！ それに、どっちなに味方したらお前ら怒るだろ？」

「当然だ！」

「当然ですわ！」

二人に止められた。しかし、訓練機で専用機とほぼ互角に打ち合
うって、どんな腕してんだ箒は。

「仕方ねえ…オルコット！ この際、あの時のケリをつけようぜ！」

「む…いいでしょう！ あの時の屈辱、今返させていただきますわ
！」

「…っわけだ。一夏、箒の方は任せたぜ」

「おい、ちよつとま――」

こんな感じで、オルコットとの戦闘が始まった。

一番の可能性はビットから放たれるレーザー、怯んだところに本
命のライフルを打ち込むといったところかな。まあ、でも代表候補
生なんだ、全部の行動に油断はできない。なら、やることは――

「行動をさせなきゃいいだけだ！」

リフレクターを後ろ向きに開き、エネルギーを放射する。そもそも、俺のISには、エネルギー消費が激しいものばかりだから、長期戦は不利というものだ。

「やらせませんわ！」

四つのビットからレーザーが放たれ、こちらへ向かってくる。一つずつなら簡単に対処は出来るが、同時に四つはかなりつらい。シールドで二発を防ぎ、二発は最小の動きで回避し、接近する。

「まだまだですわ！」

ビットの攻撃速度が徐々に上がっていく。速度は変わらないが、目に見えて、隙がなくなっていく。

「乱れ撃ちますわ！」

おいおい、ビット四つでどれだけ弾幕を張ってんだよ、あり得ねえだろ。だが、このままだと勝てねえぞ。盾をライフルに変形させる隙もありゃしないし、接近も出来ない。

「お、おいセシリア！ こっちにまで飛んできてるぞ！　つか箒！ この状態でも攻撃を続けるな！」

よく見れば周りにも被害が出ているようだ。一夏なんて流れ弾プラス箒の猛攻だからな。仕方ない、腹をくくるか。

「おらあ！」

弾幕に被弾することも構わずにオルコットに向かう。この程度の衝撃で、俺は止められない！

「なっ！？」

よし、予想通り怯んだな。ビットの操作中は動けないと判断した。そしてこの一瞬の隙、見逃しはしない！

「くらええ！」

距離を詰め、サテライトキャノン基部に設置されている高出力ビームサーベルを引き抜く。X字のようにエネルギーが放出され、緑色の刃が形成される。

そのまま真横にサーベルを振るう。

「きゃっ！」

オルコットは可愛らしい悲鳴を上げ、絶対防御が発動し、敗北となった。

これで事実上はクラスで一番俺が強いことになるのか？

「さて、と」

オルコットには一言いわないとな。

「おい、オルコット。勝負に熱くなんのは良いけどよ、ちっとは周りの事も考えようぜ？」

「う……私としたことが、少し熱くなってしまいましたわ」

「いや、ちよつとどころじゃねえだろ」

本気だつたらどうなるんだ。知りたくはないけどな。

「すげえな二人とも。俺ももっと強くなんなきゃな」

いつの間にか箒との試合を終えた一夏がやってきた。箒のISは健在のようだ。となるといったん中止にしたと判断するべきか。

「あら、もとからそのつもりでしてよ？」

「そうだぜ一夏。メインはお前なんだからお前を強化する為にやってんじゃないか」

幸いなことに、オルコットも俺も体力はあふれてるからな。

「げ……もしかして俺、墓穴掘った？」

「ま、お前がそう望んだんだから、練習を厳しくした方がいいんじゃないか？」

「そうですわね。私としても腕がなりますわ」

一夏、逃げようとしてももう遅いぜ？お前の後ろには箒が構えているからな。

「く……くそ……。俺はここまでなのか……」

何を言っているんだ一夏、ただの特訓だ。死を覚悟しなくてもいいんだぜ。

今日のアリーナでは、暫く少年の叫び声が絶えなかった。

第九話（前書き）

遅れて申し訳ありませんでした。

第九話

「では、今日はこのあたりで終わることにしましょう」

「……」

さて、今日の訓練はここまでだな、一夏が返事もしない。まあ、三人の攻撃を避けまくってたもんな。そもそも、ここまで耐えられた一夏は凄いやつだろう。

俺は結構息切れてるけど、一夏程じゃないからすぐ元通りになるだろう。

「ふん、鍛えていないからそうなるのだ」

「いやいや、ここまでやれたんだから少しは褒めてやろうぜ？」

お前らは前から持久力とかいろいろ鍛えていると思うけど、俺ら男子二人組はこんなことになるとは思わなかったから何もしてないんだぜ？

「…もう少しでも優しくしてやれば一夏の気が向くんじゃねえのかと思うんだけどな…」

ぼそりと呟いたその一言はどうやら筭には聞こえてたらしい。

「なるほど…よ、よし！ 一夏、私がお前をピッドまで連れてってやる、感謝しろ！」

返事がない、ただの屍のようだ。

お前の精一杯の優しさなのか。

「そ、そうか！ お前がそういうならば、わ、私が連れて行ってる！」

「おい、一夏は返事してねえぞ…っておい、早すぎるだろアレ」

目にもとまらぬ速さで一夏を担ぎあげたかと思うと、次の瞬間には走り出してた。あまりの行動の速さに、残された俺とオルコットは少し茫然としてしまった。

「…お前は行かなくて良かったのか？」

「あなたが何を言っていたのかわかりませんし、今から行ってもどうしようもないと思いますので」

まあ、そりゃあそうだろうな。

「ですので！ あなたがちゃんとあの二人を監視するのです！ よろしくて？」

「よろしくねえよ、自分でやれよ」

扱いが雑かもしれないけど、疲れているから仕方ない。

「いいですか！ ちゃんと二人の関係が進まないようにするのですよ！」

「それ今だけじゃねえし、難易度上がってんぞ！」

そう言つとセシリアはさつさと一夏達とは別のピッドへ戻つていった。

「…面倒くせえな」

ま、愚痴つても過ぎた事はしょうがない、どうせ戻るんだから、見るだけ見てさつさと戻るとするか。

「アンタねえ……久しぶりに会つた幼馴染なんだから、色々と言うことがあるでしょうが」

ん？この声は転校生か？

スライドドアが開くと、一夏と箒、そして凰の三人がいた。一夏の体力の回復力すげえな。

「ん、ああ藍か、お疲れさん」

「おう一夏。お前も頑張つたな」

「ん？ アンタ、昼の時の…」

ああ、そういや自己紹介してなかったな。いや、一夏が説明してたか？まあいい。

「はじめまして、だな？ 俺は我道、我道藍だ」

「ん、わかってると思うけど、アタシは凰鈴音よ、鈴でいいわ」

「ああ、よろしく頼むぜ、鈴」

正直言えば、今のところ一夏に恋してる少女たち（三人）の中では一番好感が持てる。正直、応援したいと思うくらいだな。

「それで、さっきの話の続きだけど、たとえば――」

「あー、ゴホンゴホン！」

明らかに話をそらそうとしてるな、箒。

「一夏、私は先に帰る。シャワーの件だが、先に使っていていいぞ」

うおっ、爆弾発言。

「おお、そりゃありがたい」

「やっぱお前は気付かないのな……」

「？」

？じゃねえよ、横見てみろよ、横。

「では、また後でな。一夏」

よくもまああんなこと言って澄ました顔で出ていけるな、俺だったらそんな芸当出来ないぞ。

「……一夏、今のどういこと？」

はたから見てる分にはいいけど、これ自分に置き換えると絶対に
気まづくなるよな、ま、一夏だからそんなことわからんと思うが。

「ん？ いや、いつもはシャワーは箒が先なんだが、今日は汗だく
だから順番を変わってくれって頼んで——」

「しゃ、しゃ、シャワー！？ 『いつも』！？ い、一夏、アンタ
あの子とどういう関係なのよ！？」

「どうって……前に言ったる。幼馴染だよ」

「お、お、幼馴染とシャワーの順番と何の関係があんのよ！？」

「俺、今箒と同じ部屋なんだよ」

「……は？ コイツとじゃなくて？」

「ああ、俺たちの入学ってかなり特殊な事だったから、別の部屋が
用意できなかったんだと。んで、藍は倉庫、俺は二人部屋で過ごし
てるんだ」

「俺と一夏が一緒じゃないのはあれか？ あの一件があったからな
のか？」

「ああ、それもあるかもな。にしても、あの時はほんとに焦ったな。
だって——」

「勝手に二人の世界に入ってるんじゃない！」

ん、あの件を思い出してたらすっかり鈴の存在を忘れてた。すまない。

「それで、アンタはあの子と寝食を共にしてるって事？」

「ああ。まあ、筈で助かったよ。見ず知らずの相手だったら緊張して寝不足になっちゃうからな」

「同感。初対面だと質問攻めされる気もするし」

「……」

「うん？どうした？」

「……ったら、いいわけね……」

「？」

こう見ると中々に面白い図だ。まるで兄が妹に氣遣ってるように見える。身長的に。

「だから！ 幼馴染ならいいわけね！？」

「うおっ！？ 友人でも構わないぜ！？」

「わかった。わかったわ。ええ、ええ、よくわかりましたとも」

ふむ、さっきよりは少し気分が良くなってる気がするな。

「一夏っ！」

「お、おう」

「幼馴染は二人いるってこと、覚えておきなさいよ」

「別に忘れてないが……」

「じゃあ、後でね！」

さつき鈴がいった後でが気になるな。一夏に言っという方がいいか？

「一夏」

「ん？」

「気をつけとけよ、何が起こるかわからねえからな」

「？」

わかってないか…まあ、いいか。俺が関わることもないし。そうと決まればさっさと帰るか。俺もゆっくりしたいし。

コンコン、とドアが叩かれる。

こんな時間にここにやってくるのは一人だけしか居ない。作業を途中でやめて向かう。

「また来たのか？　ここには何もないと何度言ったらわかるんだ？」

「えゝ、だって、お菓子は一人で食べるより二人で食べる方がおいしいじゃん！」

「部屋のやつらと食べよ」

「だってゝ、皆ダイエットダイエット言って食べようとしないんだもん」

目の前にいるのはお菓子を大量に持ってきているブカブカのパジヤマ？を着ている女子…言うまでもなく、本音だ。

「はぁ…別にいいけどさ…食ったら帰れよ」

「わーい、やったー！　がつくんとお菓子ー！」

声でさえよ！変な噂がまた立つかも知れねえじゃねえか。ただでさえオルコットには男色疑惑をかけられてるんだし。

「あれゝ？　何か直してる途中だったの？」

「ん？　ああ、最近見つけたんだけどよ、いろんなところに穴があ

「いてるんだが、縫えば使えるからな、直してるんだ」

「ほえ、やっぱがつくんって手先器用だね」

そう言いながら本音は部屋を見渡す。ここにはここにきてから俺が修理したものが置かれている。小さいものはおもちゃから、大きいものはブラウン管テレビまで。織斑先生にはあきれたけど、癖だからしょうがない。

「ねね、終わるまで見てていい？」

「構わないぜ…っておい馬鹿やめろ集中出来ねえっつの、さっさと背中からどいてくれ」

「え、何で？」

「わかっててやってるよな！」

背中に柔らかな感触が。そう言えばコイツ、見かけによらず大きいんだよな。…何かとは言わないけど。

「えへへ、がつくんのえっち」

やってんのはお前だけだな！落ち着け、落ち着くんだ我道。冷静になるんだ。そして明鏡止水の境地へとたどり着くんだ、我道。そうこうしているうちに時間は過ぎていき、いつの間にか服は完成していたようだ。

「で、出来た…」

「おお〜！ 凄いやがつくん！ ご褒美上げる〜！」

本音はどこからかマシユマロの袋を出して俺に渡してきた。いや、嬉しいんだけどさ、とにかく背中から退いてくれませんかね。

「お〜い、藍、入るぞー」

え、マジ？このタイミングでお前はいつてくんのか？

「おい、本音はなれろ、一夏が来た」

「ん〜…やだ…」

お前眠いんだろ！さっさと寝ろよ！ってここで寝ようとすんな！

「なあ、我道。ちょっと話したいんだけどさ……ああ、俺は何もみてないからな、気にしないでくれ、いい夢を」

状況整理。

本音、はなれた方がいいが、ベットで熟睡。

俺、ベットの前。

一夏、二人の姿を確認、空気を読む。

うし、把握した。

………

「待て、一夏！俺はお前の考えた様な事はしないし、しよつとも考えない！」

「気にするな藍！　俺はお前の事を軽蔑なんかしないからな！」

「だから違う！」

何であいつこんなときだけ空気読んだよ！しかも間違った空気の読み方！

追いかけてようとしたときにはもう一夏の姿は見えなくなっていた。

…どうすんのさ。とりあえずは本音を部屋に返さないとな。

起こすか？いや、でもなんか可哀想だな…せつかく気持ちよさそうに寝てんだし。

かといってこのままにしていたら織斑先生に地獄を見せられそうだし…

「…仕方ないか」

俺は本音を起こさないように抱えながら、本音の本来の部屋へと進む。

道中、女子達がキヤーキヤー言っていたが、予想の範疇だったので、何とかなかった。心に深い傷を負ったけど。

練習よりもこっちの方がよっぽど疲れたぜ。…もう早く寝たい。

とりあえず、寝ながら考えたのは、明日の訓練で一夏に仕返しをしようということだけだった。

翌日、生徒玄関前廊下に張り出されていた紙があった。

内容は「クラス対抗戦日程表」。

どうやら一夏は一回戦で二組——鈴と戦うことになるらしい。

これを見て俺が思ったことは、

（これで一夏の特訓を厳しく出来るな…フッフ）

そんな事だけだった。

第十話

とある日の放課後の一端。

「おい、逃げんな！」

「やだよ！　ってか、別に俺何もしてないよな！？」

「こうでもしないと俺はやってらんねえんだよ！」

「ただのやつあたりかよ！」

練習をしている生徒の中でもひと際激しい攻防を繰り広げているのは一夏と藍だった。

もともと、一方的に藍が攻撃をしているだけだが。

「って、冨とセシリアもこの状況をなんとかしてくれよ！」

「何とかしてといわれましても……」

「今の状況では助けに入ることはできないぞ……」

「こいつでえ！」

「うわっ！？　ちよっ、うわあああああ！」

俺のやつ当たりから数週間、来週からクラス対抗戦が始まる。一夏も少しは鍛えられた…と、思う。あの時は仕方なかった、そうでもしないと恥ずかしさで死にたくなるからな。

「一夏、来週からいよいよクラス対抗戦が始まるぞ。アリーナは試合用の設定に調整されるから、実質訓練は今日で最後だな」

「んじゃ、しつかり復讐しなくちゃな」

「…なんか、意味が違う気がするんだが…」

気にしない、気にしない。

「IS操縦も少しは様になってきたが、確かに復習は大事——」

「確かに復習は大事ですわね。しかし、私が訓練に付き合っているんですもの。このくらいは出来て当然、出来ない方が不自然というものですわ」

「まあ、藍から逃げるのに必死だったからな……」

遠い目をするな、遠い目を。しかし、最近になってようやく女子からの追求が少なくなってきた。ってか、そんな噂をものともせず、本音は部屋にやってくるから噂が絶えなかったのも一つの原因だなおいかえせない自分が憎たらしい。

「ふん。確かに逃げるのには役に立ったかもしれないが、中距離射撃型の戦闘法が役に立つものか。第一、一夏のISには射撃装備がない」

不思議だよな、剣一つで敵と闘うとか難易度が高すぎると思う。

まあ、俺やオルコットみたいなビーム主体のISには強いよな、白式って。エネルギー無効化攻撃持つてるからこっちの攻撃のほとんどが消えちまう。サテライトキャノンはどうなるのかわからないけど。

「それを言うなら篠ノ之さんの剣術訓練だって同じでしょう。ISを使用しない訓練なんて、時間の無駄ですわ」

「な、何を言うか！ 剣の道はすなわち見という言葉を知らぬのか。見とはすべての基本において——」

「一夏さん、今日は昨日の無反動旋回のおさらいから始めましょう」

「それより、実戦の途中途中で指示した方がよくないか？」

「確かにそちらの方がいいかもしれませんが……では一夏さん、今日は私と——」

「ええい、このっ——聞け、一夏！」

「俺は聞いてるって！」

いつもと大して変わらない会話を楽しみながらアリーナのピッドに到着。すると目の前にとある人物……ってか、鈴だった。

「待っていたわよ、一夏！」

まさかここで鈴に会うとは。一瞬にして幕とオルコットの雰囲気が悪くなったぞ。お前たちはわかりあう気はないのか。

「貴様、どうやってここに——」

「ここは関係者以外立ち入り禁止ですわよ！」

可哀想に、話を途中で切られるのって中々にきついよなあ。

「あたしは関係者よ。一夏関係者。だから問題なしね」

「ほほう、どういう関係かじっくり聞きたいものだな……」

「盗人猛々しいとはまさにこの事ですわね！」

女子が切れると怖いよな、男子だとあんまり怖くないのに。普段温厚な人が切れると怖いっていうけど、女子が切れても怖いよな。

「……おかしい事を考えているだろう、一夏」

「いえ、何も。人切り包丁に対する警報を発令しただけです」

「あ、確かに怒った筈の雰囲気ってそんな感じがするな、いいたとえだぜ、一夏」

「き、貴様たちは——！」

手に何も持っていないくても、その手に日本刀を持ってるように見えてしまった。

「今はあたしの出番。あたしが主役なの。脇役はすっ込んでてよ」

中々にきつい言葉を浴びせるんだな、鈴って。筈に通用するかわからんが。

「わ、脇やつ——！？」

ほら、なんかもう噴火寸前の活火山みたいな状態になったじゃないか、見てるこっちが怖いぞ。

「はいはい、話が進まないから後でね。……で、一夏。反省した？」

「へ？ なにが？」

「だ、か、らっ！ あたしを怒らせて申し訳なかったなーとか、仲直りしたいなーとか、あるでしょうが！」

「いや、そう言われても……鈴が避けてたんじゃねえか」

「あんたねえ……じゃあ何、女の子が放って置いてって言ったら放

置するわけ！？

「おう」

なんかよくわかんないから会話に参加出来ねえけど、どうすりゃいいんだ、これ。

「なんか変か？」

「変かって…ああ、もうっ！ 謝りなさいよ！」

「だから、なんでだよ！ 約束覚えてただろうが！」

「あつきれた。まだそんな寝言言ってるの！？ 約束の意味が違うのよ、意味が！」

約束？意味？よくわからないので一夏に一番近い筈に聞いてみる。

「なあ、鈴の言っている約束って何の事だ？」

「あの朴念仁が将来の約束をしたち、誓いを勘違いしたのだ」

将来の誓い？ああ、結婚って事ね…って結婚！？

「何お前ら、結婚の約束してたの？」

「け、結婚の約束なんて…」

「何言ってるんだ？ 俺はおごってもらって約束をしてもらっただけだぞ？」

「……」

おごつてもらうつ？何を？まあ、わかるのは一夏が勘違いした、か。
可哀想だな、鈴も。

「ほんとに、謝る気はないのね？」

「だから、説明してくれりゃ謝るっつーの！」

「せ、説明したくないからこうして来てるんでしょうが！」

「そうだよな、恥ずかしいもんな」

「……ッ！ アンタ！」

鈴が赤い顔してこっちをにらむけど全然怖くない。むしろ同情してしまう。

「じゃあ、もうこうしましょう！ 来週のクラス対抗戦、そこで勝った方が負けた方に何でも一つ言う事を聞かせられるってことでいいわね！？」

「おう、いいぜ。俺が勝ったら説明してもらうつからな！」

「せ、説明は、その……」

「一夏、それは酷だぜ？」

「なんだよ藍、なんか知ってるのか？」

それは俺からは言えないな、本人が言わなきゃ意味がないし。

「とにかく、謝る練習でもしときなさいよ!」

「なんでだよ、馬鹿」

「馬鹿とは何よ馬鹿とは! この朴念仁! 間抜け! アホ! 馬鹿はアンタよ!」

「うるさい、貧乳」

ドガアアアアアアン!

うわ、一夏が爆弾発言したから鈴が切れたじゃないか、しかも殴った場所の壁へこんでるし。

「い、言ったわね……。言うてはならないことを、言ったわね!」

「い、いや、悪い。今のは俺が悪かった。すまん」

「今の『は』!? 今の『も』よ! いつだってアンタが悪いのよ!」

「さすがにそれは言いすぎだと…」

「アンタは黙ってて!」

…悪かったよ。何も口出ししないよ。

「ちょっとは手加減してあげようかと思ったけど、どうやら死にた

いらしいわね……。いいわよ、希望どつりにしてあげる。——全力で、叩きのめしてあげる」

そのまますたとピッドを出ていく鈴。残された俺たちは微妙な雰囲気だ。

とりあえずは試合の為に、一夏の気を楽しんでやらないとな。

第十話（後書き）

指摘等ありましたらお願いします。

第十一話（前書き）

お久しぶりです。

久々なので所々あやしいところがあります。

第十一話

『今回の目的は分かっているな？』

「ええ、彼の実力の確認ですね」

『その通りだ。が、なるべく早めに済ませることだ、我々の行動に
あれが気が付く前に』

その言葉と共に通信が切れる。

そんなことは最初から承知している。彼がISを操りだしたのはつい最近だ。実力の確認するなど簡単にできる。

…家族を傷つけるのは気が進まないけど、計画のためだ、やらせてもらうよ、藍。

さて、今日はクラス対抗戦初日、一夏と鈴の試合がある日だ。

朝来てみたら行列が物凄くてかなりビビった。二人の噂は知ってるがここまでとはな…。

ちなみに、俺は篝達とは別行動だ。あいつらはピッド、俺は観客席の最前列だ。

一夏の事は応援しているけど、こういうものは両方の活躍を観たいしな。

さて、そろそろ試合が始まるみたいだ。

鈴の機体をみて印象的なのは肩付近にある非固定浮遊部位アンロック・ユニットだな。

…毎回思うんだが、何で俺の機体だけ全身装甲なんだろうな、シールドエネルギーがあるのに。いや、気にしてないし、気に言ってるから別にいいんだが。

『それでは両者、試合を開始してください』

ん、始まったなと思ったらいきなり二人とも動きはじめやがった。一夏も成長しているよな、初心者からあの一撃を防げるようになったんだから。

…おっと、また鈴が動いた、というよりは一夏が防戦一方になってきてるな。

まあ、一夏は初心者だし、鈴は代表候補生だから、この差は当然と言えるかもしれないな。

ん？肩のアーマーが開いて中であつた球が光つたと思つたら一夏が吹っ飛ばされた。

「んだありゃ!？」

驚愕してる間にも鈴の攻撃は続く。なんだろうあれ、空気砲か？
周りも困惑している顔が多い。

お、いったん距離を置いたな。…一夏が何言ってるのか分からない
が、鈴が少し気圧された気がする。

まあそれもわずかな時間で、再び武器を構える二人。

…たぶんだけど、一夏はあの訳の分かんない一撃をもらう前に接近
して攻撃するつもりだろう。俺だったらそうするな。

そして一夏は瞬間加速を使い、イグニッション・ブースト鈴に接近する。

観客も沸き、試合も最高潮のこの瞬間、

——爆音が鳴り響いた。

爆音の元凶はステージ中央にある煙の中にあるらしい。おい、ど
うすんだ、いまの衝撃で持ってたジュースが服にかかっちゃったぞ。
目を凝らして見ると煙の中になんだろう、人影かあれ？が見える。

『試合は中止、皆さんは落ち着いて待機してください』

スピーカーから聞こえてくる先生の言葉に耳を疑った。待機？避
難じゃなくてか？

「何これ！？ 扉が開かないわよ！？」

なるほど、だから待機ってことか。ってかあの子の発言は拙くな
いか？ほら、周りが焦りだした。

煙の中から出てきたのは俺と同じ全身装甲の濃い灰色の機体だった。

遠目で見ても分かるくらいあの機体は手が異様に長い。あんなに長い手が必要なのか？

…どうする？手助けに行くか、それとも脱出の手伝いをするべきか？

『おい、我道』

とと、話を聞こうと思ったたら向こうからきた。…しかし、この様子だと全くこの事態に驚いてないみたいだな…さすが織斑先生。

『お前はまず生徒を避難させろ。終わり次第第一夏達の支援に当たれ』

『…了解！ この我道様に任せときな！』

なんとなく言ってみたけどちびつと恥ずかしい。

気持ちを切り替えよう…うし、そうとなればまずは扉を壊しに…じやない、開けにいくとするか！

まずはISを起動つと…

——アリーナ上空に熱源。所属不明のISと断定。ロックされています。

ん？っておいちよつと待てよ！いきなり撃ってくる馬鹿がいるかよ！こっちは人がたくさんいるんだぞ！？何とかシールドに変形させて防げただけ！

「おいてめえ！いきなり何してんだ！」

「……………」

当然ともいえるが、無視された。

近くで見るとよくわかる白亜の機体の姿。腕にもなんかついていて、アンテナが長い。目はどこかのロボットアニメの敵役で出てきそうなモノアイだ。

謎のISはゆっくりと腕をこっちに向けて…うおっ、ビーム！？あのヘンテコな腕のパーツは武器だったのか！

「くそっ！」

シールドをライフルに変え、三発ほど撃ってみるが…駄目か、やっぱそう簡単に当たってくれるわけねえよなあ…

「君、脱出しなさい！　ここは先生が…きゃっ！？」

あ、打鉄を装着した先生に攻撃を始めやがったを…って観てる場合じゃねえ！

「お前の相手はこの俺だあ！」

サーベルを振りおろしながら二人の間に割って入る。

「先生、大丈夫か？」

「え、ええ。だけど、エネルギーがこんなに削られるなんて…」

打鉄でもこんな風になるのか………だったら！

『…なあ、織斑先生』

『どうした』

『こいつの相手、俺一人でやらしてくれないか？』

『……いいだろう、生徒の事は先生達に任せるといい』

織斑先生は少し考えた後に返事を返してきた。

サンキュ、織斑先生。うし、これで許可ももらえたし、やれるだけやってやる！

「我道君一人で大丈夫なんですか！？ やっぱり他の先生も一緒にいた方がいいんじゃない？」

「先ほどの動きを見ただろう。あの動きについていけるのか？ それに、ついていけたとしてもあのISの火力を知っただろう？ 教師でもあのザマだ」

一夏と鈴、そして上空の藍が写っているモニターを観ながら千冬は続ける。

「それに、あいつの機体は火力、防御面共に優れている。少しの攻撃ではびくともしないのを知っているだろう」

モニターでは互いが激しくぶつかりあっているが目に見えて不利な藍と、防戦一方の一夏達の姿がある。

「確かに、我道君の機体は高性能ですもんねえ…どこが作ったんでしょうか？」

「……………あんな機体を作ったという記録はどこにもないがな…」

千冬の呟いた言葉は真耶には聞こえなかったようで、モニターをじいつと見つめていた。

「あ！ 我道君が優勢に…って、あれは为什么呢？」

真耶がみているのは藍の方だった。そこに写っていたのは、謎の機体の周りに浮遊する謎の機械だった。

「おそらくオルコットのビットと同様なものだろう。…さて、これをお前はどうか乗り切る？」

くそつ、実力が違いすぎる！
こいつが頑丈じゃなかったらとっくに終わってた！

「このおー！」

さつきからこっちの攻撃は当たらない、あっちの攻撃は当たる。
つたく、諦めたくなってくるぜ。

「けど、諦めねえ！」

「……………！」

よし！ライフルがともに肩に当たった！このまま追撃を…って
なんだ？あいつの雰囲気が変わった気がする。

「……………」

…あれはオルコットのビットみたいなモンか？…おいおい、あいつより数多いじゃねえか、倍はあるんじゃないの？

って、やべ、観てる場合じゃねえ！あれの厄介さは経験済みだ、それにあの数を動かされたらいくら動いてなくてもこっちが動けなくなる！

「……………」

まじかよ…こんな複雑な動き読めるわけねえだろ！

こんなノリだが、実際かなり追いつめられていて、かなりヤバイ。今までずっとコイツ（GX）の堅さに頼ってばかりだったから、危機感があまりもてなかったけど…これから、いや、今からそれを改めないといけないな。

「負けてたまるかよ！」

織斑先生の仕置きも怖いが、何故かこいつには勝たなくちゃいけないという気持ちがあった。

大体人の動きを止めるのには、思いもよらない行動をとられた時だ。それがこいつに通用するとは思えないが、無人のISは作られてないはずなんだ、かける価値は十二分にある。

…よし、これでいけるとこまで行くぜ。

あいつの攻撃を受け続けるのは仕方ない。リフレクターも破損が激しいと警告が出ている。あと少しだけいい、持ってくれ。

リフレクターを後ろに展開させ思い切りエネルギーを放出させる。

このビームの雨の中突っ込んでくるとは予想になかったのか、ビームと動きが止まる。

この一瞬を逃してはいけない。周りの音が聞こえなくなるくらい俺は手に持っているビームライフルを謎のISに向けて『投げた』この行動も予想外だったようでまた動きを止める。動き始める前に次の行動へ。

今度は飛んでいるライフルに向かってビームサーベルを全力で『投げた』

サーベルはそのままライフルを貫き、相手の近くで爆発した。

謎のISがよろけた隙に何とか接近し、両肩をつかみ、逃がさないようにする。

そして俺は肩にあるバルカンを撃ち放った。

数十発ほど撃ったところでビームと蹴りを腹にくらい、引き離される。

どうすればいい？俺のエネルギーは100を切ってる。武器もない。対して相手は不明。圧倒的不利だ。

「……………」

俺が相手に対して危機感を覚えながら身構えていると動きがあった。腕を持ち上げ――

「ハア？」

――手を振ってきた。

謎の行動に戸惑っているとそいつは不意に後ろを向き、空へ消えていった。

「なんなんだよ一体……」

そう呟いたとたん、だんだん周りの音と疲労がやってきた。
敵を撃退したのは喜ばしい事なのに、疑問が残った。

そうだ、一夏達は！？

「一夏っ！」「

蹴落とされたおかげで鈴の声まで聞こえた。ステージの方を向くとオルコットが手長ISに攻撃を仕掛け終わったところだった。

「俺が心配する必要もなかったかなあ……」

何故シールドが破壊されてるのかわかんないけど、まあ、何はともあれこれにて一件落着……じゃねえ！あいつまだ動いてやがる！俺のエネルギーはおおよそ90。ブースト一発が限界か。間に合えよ……！

「ふう。何にしてもこれで終わ……我道さん！？」

途中でオルコットとすれ違うが、気にせずあのISのもとに進む。
一夏も気付いたのか俺と同じくらいの速度で突っ込む。

「おおおおおおおっ！」「

一夏へと向けられた左腕に俺は脚を叩きこみ軌道をそらす。スレスレでビームを回避した一夏がその手に持った雪片二型でISを切り裂いた。

謎のISは完全に動きを止め、地へ伏せた。

俺たちはそれを確認した後、二人とも笑顔で拳をぶつけた。

第十一話（後書き）

ベルティゴ、上手く表現出来たのか不安です。
何かありましたら教えていただけると幸いです。

第十二話（前書き）

久々に書いたのであいまいな所があると思います。
ご指摘等、ありましたらお願いします。

第十二話

謎の機体を撃破&撃退後の話。

あの後、一夏は気を失ってしまい、急いで保健室に運ばれた。ついでに俺も運ばれたんだが、俺は背中に軽い打撲で済んだ。あの猛攻を受けてこの程度とは、つくづく機体に助けられちゃってるな俺。

さらに、俺の機体は戦闘に支障が起こらない程度の傷らしい。装甲堅過ぎるだろ。

一夏は全身打撲だそうだ。何でも鈴の最大出力の一発をもらにもらったらしい。何があったのさ。

今は湿布をもらって自室へ帰る途中だ。

…あー、そーういや武装、ほぼ壊し…壊れちゃったんだよなあ…一応、武装の確認はしておくか…

『シールドバスターライフル	破損
大型ビームソード	破損
サテライトキャノン	破損
リフレクター	破損
ショルダーバルカン	損傷
ブレストバルカン	異常なし』

……………これは酷い。

まともに使えるのバルカンだけか。バルカンだけでどうしろと。

…ん？これは…

『特定の条件を達成。機体情報更新中…』

特定の条件？なんだろう、武器の破損？それとも…あいつと戦ったからか？

あり得ない…って事は無いんだよな、そもそもコイツ自身があり得ない物なんだから。

こいつの装甲、今の技術じゃ作るのは馬鹿みたいに金と時間がかかるらしい。

…いや、それ以前におかしいのは何故『ISが発表される前からこいつは俺のそばにいたのか？』って事だよな。

あの時、一夏と共に迷い込んだ場所で、あいつがISに触れた時、こいつも共鳴するように展開されたんだよな。

そして、流れるままここへ…って感じなんだよな。

「ん？ あれは…」

俺の部屋の前に人影。いつもと変わらないダボダボの制服、眠そうな目。間違いない、あいつだ。

「…お前は何人の部屋の前で寝かけてるんだ」

立ったまま寝るってある意味で見てみたいけどな。

「ん？ …おお、がつくん。来るのが遅すぎて眠たくなっちゃったよ」

「俺は待たせてないけどな」

「つれないねえ、…あれ？ そっぴやかんちゃんどこ？」

「俺が見た時にはお前一人しかいなかったぞ」

「えへへ、やっぱ帰っちゃったのかな、じゃあ私も帰るね、ばいばい」

「ごそごそ裾の中から取り出したのはお菓子の袋だった。…どこから取り出してんだお前は…そもそ何しに來たんだよ。」

「いや、しかしあいつもよくあんなゆつくり歩いていけるよな。一夏のほほんさんというのも頷ける。」

「とりあえず、今日はもう休もう。んで、この更新が終わるのを待ってみるかな。」

学園の地下50メートル。機能停止したISはそこへ運び込まれ、解析が始まっている。

千冬は今日の二つの戦闘映像を無表情で繰り返し見ていた。

「織斑先生？」

「ウィンドウが開く。ディスプレイに割り込んできたのは真耶だった。」

「どうぞ」

ドアが開くと、普段の動きよりも数倍きびきびした動きで真耶が入室した。

「例のISの解析結果が出ましたよ」

「ああ、どうだった？」

「はい。あれは——無人機です」

世界中で開発されているIS。その中の完成されてない技術。遠隔操作と独立稼働。そのどちらか、あるいは両方の技術が使われていると言ったことだ。

「どのような方法で動いていたかは不明です。織斑くんの攻撃で機能中枢が焼き切れていました。修復も、おそらく無理かと」

「コアはどうだった？」

「……確認しましたが、登録されていないコアでした」

「そうか」

やはりな、と続けた千冬に怪訝そうな顔をする真耶だが、続けて報告をする。

「それと、我道くんと戦闘をしたISですが、逃走後すぐに反応が消失。すぐさま搜索に当たりましたが、人影一つ無かったそうです」

「そうか。…いずれにせよあいつには聞かないといけないことが増えたな」

今回の事件、あいつと何か関係があるのだろう。と呟いた後、千冬は再びディスプレイに視線を戻す。

世界最高峰の戦士。今の千冬の顔は教師ではなく、最強と謳われていた昔を思い出させていた。

「それで、彼の實力はどうだった？」

暗い部屋の中で、二つの影が会話をする。

「予想以上です。機体さながら彼の實力も相当なものでしょう」

「フフフ…それでいい、彼にはその調子で強くなってもらわないと困る」

「あの発想には驚かされました。思わず本気になってしまっただけ」

その声には喜びが滲み出ている。

「そうか。…会える時が楽しみだ」

「……きっと、すぐに会えますよ」

「そうかもしれんな。…では、計画を進めていくとしよう」

あのころに戻るための。人影はそう呟いて、部屋から消えた。

「……………ええ、分かっています……………分かっています……………それが……………なのだから」

残された少女の呟きは、誰にも届かない。

「我道、私だ、開ける」

やることは終わってさあ寝よう、ってところで普段と変わらない
織斑先生の声がした。

「…なんですか？ 何もしてないと思うんですけど」

「引っ越した、ついてこい」

早いよ、予想外すぎて動けないよ。って、先行かないでください、
場所わかんないっす。

「ん？ ここって…」

先生についていくとそこは見なれた場所だった。

「今日からあいつと暮らしてもらつ。さつさと荷物をまとめてこい」
先生についてった先は一夏の部屋だった。と、なると俺と篤が入れ替わるのか。

「…我道、一応聞いておく。あいつは…あのISはお前の知り合いか？」

そう聞いてくる先生の顔はとても真剣で、ふざけた返事で返そうとは思えない。ってか、そんなことしたら確実にボコボコにされる。

「そんなこと聞かれても…俺にIS操縦者の知り合いなんていなかったし…」

「そうか。ならいい、さつさと準備をしてこい」

了解です先生。…ISの知り合いなんてあいつらぐらいだし…だとして…

…あいつら、なのか？ だけどあいつらは…

もやもやした気分でとりあえず一通りの準備をし、一夏の部屋へと向かう。

ん？ あれは本音達か。何やってんだ？

「おーいお前ら、何やってんの？」

「わわっ！ 我道くん！？」

「あ、がつくん、ちょっとあれみてみなよ」

そうやって指差した方向は一夏の部屋の方だった。一体何があるってんだ。

「ら、来月の、学年別個人トーナメントだが……」

ん？あれは箒じゃないか。それと一夏。

「わ、私が優勝したら——」

よく見ると頬が紅潮してる。というか現在進行形で赤くなってる。ふと三人組みの方を観てみるとにやにや笑ってた。

「えつとね、偶然ここを通ったらおりむーの部屋の前でうろつろしてたから何かなってみてたんだよ」

ああ、なるほど。

「つ、付き合ってもらう！」

「……はい？」

箒の大きな声が響いた。

……… ってか一夏、絶対意味分かって無いよな、あの表情は。

第十二話（後書き）

ゆっくり書く時間が欲しい。わりとマズジで。

第十三話

武装が使えなくなっただけからはや三日。

丁度いいと思い俺はオルコットにオールレンジ攻撃を撃ってもらい、それを避ける練習をしていた。

もちろん、あの時の戦闘で悔しかったからの行動だ。

初日は十秒と持たなかったけど、三日目は何とか三十秒程度当たらないようになった。

鈴のあれはさすがに無理、目に見えない物をどうやって避けると。

一夏じゃあるまいし。

もちろんオルコット自身も成長してきている。俺との射撃、一夏との実戦を何度も繰り返し返してるので、確実にクラス代表選の時より実力が上がっているのがわかる。

今日もオルコット達と特訓をするために準備体操中。いきなり体動かしたら怪我するしな。

『報告 機体情報更新完了 武装を確認してください』

「ん？」

「どうした、藍？」

隣で同じように体を動かしてた一夏が疑問に思ったようでこっちに顔を向ける。

「いや、ちよつとな…」

機体情報更新？武装の確認…？ああ、そついやあの時なんか出てたな。

どうなったんだろう。時間も少しあるし一夏と模擬戦でもしてみ
かな。

『武装内容』

ディバイダー

大型ビームソード×2

ビームマシンガン

ブレストバルカン×4

X-グレネーダー×2

ハイパーバズーカ 』

「……へ？」

「…本当にどうしたんだよ？」

よくわからないけど、こういうのって大抵は武器が一個増えるく
らいじゃないのか？こんなことってあるのかよ、しかも自動でなん
て。

「いや、なんか機体が更新したとかどうとか…訳がわかんねえ」

「うーん…あ、展開してみたらどうだ？」

おお、一夏が珍しくいい発言をしたぞ、女子絡みでもないのに。

「…何か変な考えしてないか？」

「いんや、べつつに〜？」

さて、機体の状態も気になるんでさつさと起動つと。

「…特に変わった様子は無いように見えるけど…」

「あ、藍、背中が変わってる」

ん、一夏に言われるまで気が付かなかった。

さっきの授業まで半壊したりフレクターだったのに、今はX状に部品が配置されてる。

「エネルギーの容量が増えてる…って事はこの後ろのパーツはエネルギーを増やすものか」

「お前の機体、ただでさえダメージ通りにくいのにそんなもんつけてたら倒すの無理じゃないか？」

「お前には零落白夜があるだろ」

「半分しか削れなかったけどな」

半分も削れるだけ十分だろ。オルコットのビット攻撃は全然聞かないし。俺の攻撃バルカンしか有効手段なくなるし。

一夏とのんびり話しながら武器の確認をしていく。寮以外でこんなにゆったりとした時間は久々な気がする。一夏の周りには大体一人か二人ついてるしな。

お、バズーカか、一夏にいい対抗手段を手に入れられたな。

それでこれがディバイダーか…

「…盾か？それ」

「いや、説明をみると武器と飛行サポートが出来るらしいけど…お
お」

武器と念じると少し遅れて盾が真ん中から割れて何かの発射口が
現れた。説明によると、19連装ビーム砲らしい。

「一夏…この穴全部ビームを撃つらしいぜ…」

「お前の機体が凶悪になっている気がするぞ…」

対人戦に強くなったよなGX。前のあれはとてもしゃないが人に
向けて撃てたもんじゃないしな。

「一夏、武器の性能も一通り確認して見たいから、ちょっと相手し
てくれないか？」

「別にいいけど…練習もあるからあんま本気でやるなよ？」

分かってるって。

互いに武装を展開して空中に立つ。一夏は片手に剣を、俺はディ
バイダーと銃を。

「それじゃあいくぜ？」

俺が頼んだのだから俺から動くのが筋というものだろう。
右手で持っているマシンガンを一夏に向けて乱射する。

「うおっと…前より避けづらいな…」

難なく避けてよく言えるぜ。

一夏の対処法は近づかせない事が第一だな。俺は一夏や箒みたいに剣道とかやってたわけじゃないし。いや、一応護身術的なものは教えてもらってたからここまでやれてるんだがな。

「ならさっそくこいつで！」

マシンガンを撃ちながらディバイダーを横向きに構え、標準を一夏に向ける。

ディバイダーから放たれた光は扇状に広がり、一夏に迫る。

「う…おっ！ 横に逃げるのは無理っばいな…」

「それが瞬間加速か…厄介なモン身に付けたなお前も」

イグニッション・ブースト

思わずため息が出そうになる。これで一夏はまた強くなっていくのか。嫉妬しそうだぜ。

戦いを見る中で見るのと戦いの中で見るでは大きな違いだなと痛感する。

「お前はブースト使えば同じことができるだろ！」

こっちの方がエネルギーの消費がでかいんだぜ？

「今度はこっちの番だ！」

一夏が瞬間加速を使いこつちへ向かってくる。

一瞬で目の前まできたと思うと同時に斜め下から剣が飛んできた。

「うおっ…こついうとき盾があると助かるな」

前はいちいち切り替えないといけないから反応が遅れる時があったからな。

俺は銃をしまい、バックパックからビームサーベルを取り出し振り下ろす。

一夏は紙一重でそれを避け、薙ぎ払いをしてきたので、サーベルで対応する。

「くっ…特訓してなきゃ直撃だったな」

「やっぱ強いな、藍！」

「そりゃ、お互いさま…だろっ！」

一度一夏と距離をとる。

前に戦った時より互いに強くなっているのがわかる。特に一夏。

「本気じゃないんじゃないのか？」

「何の事だかさっぱりだな！」

どちらともなく近づき、衝突する。

こうして一夏とまともに戦うのは初めてな気がする。他人からのアドバイスもないし。

何度も剣とサーベルがぶつかり、激しい音が響く。

このままだとたぶん、腕の差で一夏が勝つだろう。だとしたら…

「こいつで！」

「…！ あぶなっ！」

俺が一夏に投げたのはグレネード。つば競り合いの最中に投げたから互いにダメージが当たる距離。

一夏はぎりぎりのところで回避。そこが俺の狙い目。衝撃は我慢するしかないけど仕方ない。

爆風が起き、あたりは煙で何も見えないが、一夏が回避した方向は分かっている。

ブースト、ディバイダーも全開で一夏がいると思われる場所へ向かう。

「！」

ビンゴ。後はどっちが先に決められるかだが…

「引き分け、だな」

「実際はお前の勝ちだけだな」

「お前みたいな装備だったら首が飛んでるよ」

俺の首元には一夏の雪片二型が。

一夏の顔には俺の銃が突きつけられていた。

「ここらで終わらないといけないな」

「個人的には終わりたくないけどな」

互いに苦笑いをする。なぜなら、俺らの視線の先には。

「さあ、どうしてこうなったのか説明してもらいますわよ？　一夏さん、我道さん」

とてもいい笑顔のオルコットと、

「……………」

どこか悔しそうな筈の視線だった。

「これでお前との勝敗は三勝二敗一分け、か」

ちなみに勝ってる方が俺な。

「次は勝つ！　ってもまずはその装甲をどうにかしてほしいぜ……」

下で待っているだろう出来事から必死に目をそむけて話を続ける俺達。

「お前との戦いはひやひやするけど楽しいな、やっぱり」

「それはこっちも同じだぜ」

二人して声をあげて笑う。後の事を想像したくないから。

「ああもう、二人とも早く下りてくださいー!!」

「「あ、あははははは…はあ」「

俺たちは、この後、延々と続く説教と、いつもより厳しい練習をする羽目になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8200u/>

IS 衛星砲をもつIS

2011年11月13日21時23分発行